

932-W73-2ウ

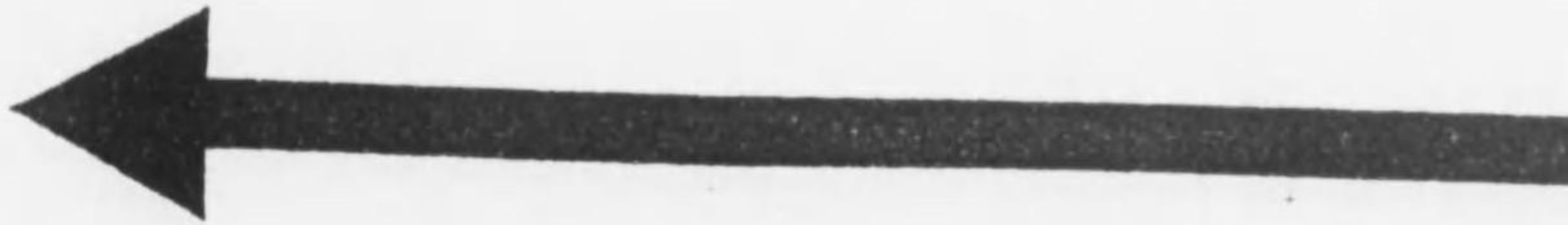


1200500759852

932  
73  
2



始



569  
14

岩波文庫

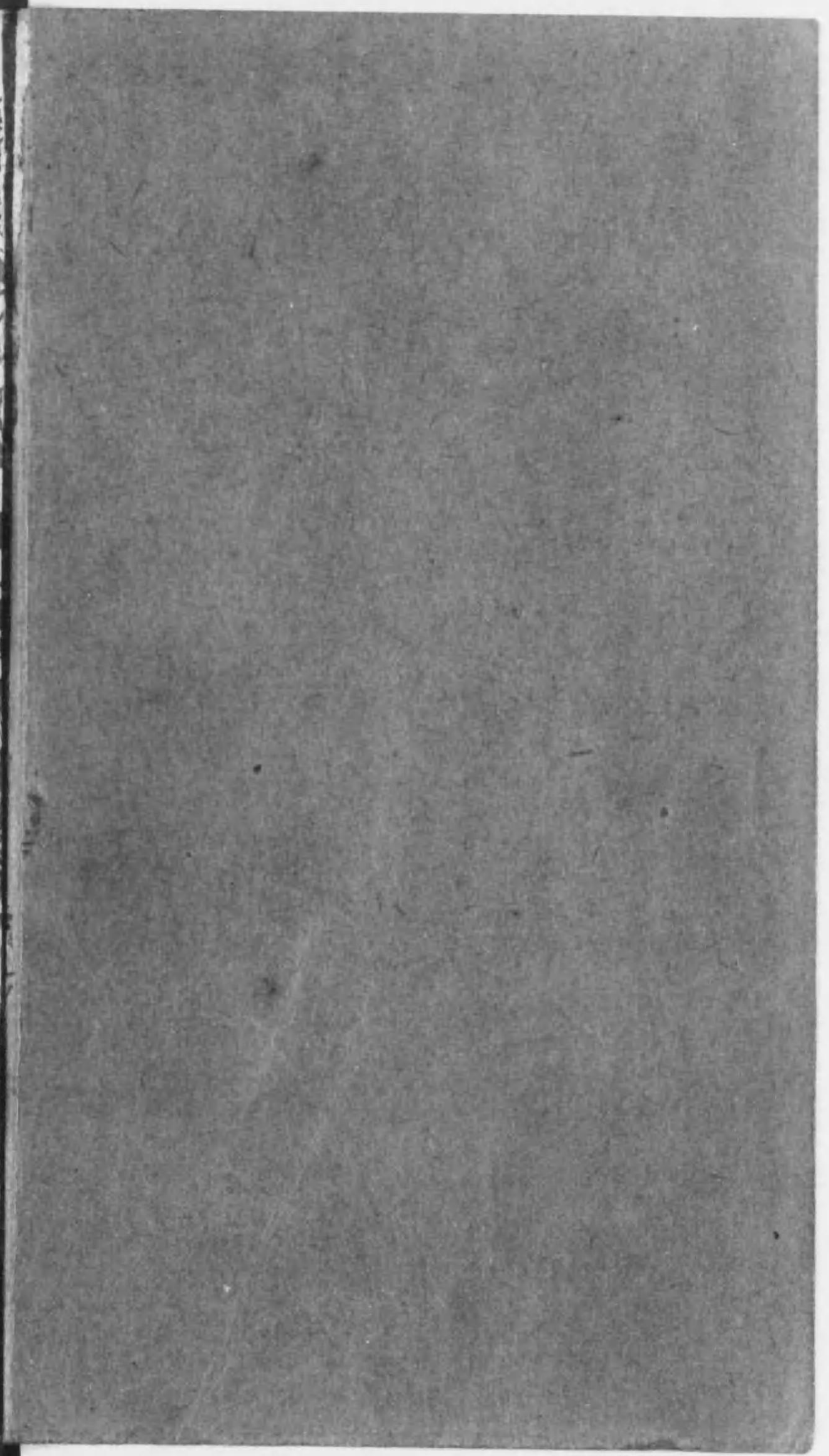
1272

納本

メロサ

ワイルド作  
佐々木直次郎譯

岩波書店



493

932  
WT3  
2



店書波岩



569-14

## 序

3

オスカール・ワイルド（一八五四—一九〇〇）の戯曲「サロメ」は一八九一年にパリに於てフランス語で書かれたものである。ワイルドは戯曲の方面ではそれより以前に「ヴェラ」と「パデュアの公爵夫人」とを書いてゐたが、ロンドンの劇場に於て舞臺的成功を博した「ウィンダムミア夫人の扇」以下の社會喜劇をまだ發表してはゐなかつた。「サロメ」は、その斷章を作者がパリーの文人たちの前で屢々讀み上げてゐたけれども、上演の意圖を以て書かれたものではないといふ。偶々フランスの名女優サラ・ベルナルがこの作を知り、作者の承諾を得て、一八九二年ロンドンの宮殿劇場で上演しようとして既に下稽古を始めたが、イギリスでは聖書に記されてゐる事件を舞臺に演ずることを禁じてゐたので、検閲官によつてその上場を禁止された。一八九三年の二月にフランス語の原作がパリ及びロンドンの兩市で六百部の限定版として出版され、翌九四年二月には作者の親友アルフレッド・ダグラスの筆になる英語譯が六百部ロンドンで刊行されたが、その英譯本にオーブリー・ビアヅリーのかの怪異な幻想的な畫が初めて挿まれたのであつた。一八九六年、ワイルドがレッドディングの獄舎にある時に、この戯

曲はパリに於てリユーニエ・ボエの率ゐる創作劇場によつて初演され、その時は多少の成功を齎し得たに過ぎなかつたが、一九〇一年、作者が落魄の中にパリに客死して後一年ならずしてベルリンで上演され始め、マックス・ラインハルトが彼の小劇場に演出して劃期的の大成功を収めるに及んで、ドイツ各地にシエークスピア劇以上の歓迎を受け、一九〇五年にはリヒャルト・シュトラウスの作曲による樂劇化もあつて、その流行はやがて大陸全體に擴がるに至つた。その流行の熾烈さは、この作が制作後十数年の間にオランダ語、英語、スウェーデン語、ドイツ語、ポーランド語、ロシア語、スペイン語、チェック語、イタリー語、ギリシア語、マジャール語、カタロニア語、ユダヤ系ゲルマン語、日本語等に多くは幾種となく翻譯されて出版された事實によつても、幾分察せられよう。爾來、ヨーロッパ、アメリカ、アジア、その他世界各地の舞臺に演ぜられ、衝撃的な主題と單純にして強烈な劇的效果とを以て、近代劇中の最も流行的な劇の一として普く知られてゐる。映畫化されたことも一再に止まらない。わが國に於ては、一九〇九年に森鷗外によつて譯出されて以來、大部分は英語譯からの重譯であるが、邦譯は少くとも十數種以上に達するであらう。初演は一九一三年東京の帝國劇場に於て島村抱月主宰の藝術座によつてなされ、外題役には松井須磨子が扮し、その後種々の劇團によつて幾度も上演された。

5

序

ハプテスマのヨハネの首を斬らせたユダヤの王女サロメに關する傳説は古くから存在し、夙に聖書や紀元第一世紀のユダヤの歴史家フラヴィウス・ヨセフスの「ユダヤ古事」その他に記されてをり、近代に至つても幾多の詩人、小説家、劇作家、畫家等に題材とされたが、ワイルドのこの戯曲の源泉となつたのは、聖書とギユスターヴ・フローベールの小説とであると言はれてゐる。新約全書のマタイ傳第十四章第一節—第十一節に、「そのころ分封の君ヘロデ、イエスの聲名を聞きて、その僕に曰ひけるは、これハプテスマのヨハネなり、彼死より甦りたり、故に異なる能を行ふなり。前にヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に由りてヨハネを捕へ、縛りて、獄に入れたり。こはヨハネ、ヘロデにこの婦を娶るは宜しからずと言ひしに因る。彼ヨハネを殺さんと欲へど、民これを預言者とするにより、彼等を懼れたりしが、ヘロデ誕生の日を祝へる時、ヘロデヤの女その座上にて舞をなし、ヘロデを悦ばせければ、いかなる物にても求めに任せて予へんとヘロデこれに誓ひたり。女、その母の勧めありしに因り、ハプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜はれと曰ふ。王憂へけれども、既に誓ひたると、席に列れる者の爲に、予ふることを命じ、即ち人を遣し、獄に於てヨハネの首を斬らせ、その首を盆に載せて、女に予へければ、女はこれをその母に捧げたり。」とある。また、同じく新約全書のマコ傳第六章第十四節—第二十八節には、「イエスの名播りければ、ヘロデ王これを聞きて、曰

ひけるは、パプテスマを施ししヨハネ死より甦れる故に、奇異なる能をなすなり。或る人はこれをエリヤなりといひ、あるひは往昔の預言者の如き預言者なりと曰ふ。ヘロデこれを聞きて、曰ひけるは、これわが首斬りしところのヨハネなり、彼死より甦りたるなり。曩にヘロデその兄弟ピリポの妻ヘロデヤの事に由りて人を遣しヨハネを捕へて、獄に繋けり。そはヘロデがかの婦を娶りしを、ヨハネ諫めて爾兄弟の妻を納るるは宜しからずと曰へるに因りてなり。ヘロデヤ彼を怨みて、殺さんと欲ひしかど、能はざりき。ヘロデはヨハネを義しく且つ善なる人として知りて彼を敬ひ、彼を護り、彼に聞きて多くの事を行ひ、且つ喜びて彼に聴くことをせり。かくてヘロデその誕生の日もろもろの大官、千人の長、およびガリラヤの尊き人々に享宴をなせる機會の日いたりければ、ヘロデヤの女きたりて、舞をなし、ヘロデとその席に列れる人々を樂しましむ。王その女に曰ひけるは、何にても我に求へ、爾が望むところのものは我なんぢに與ふべし。また彼に、凡そ爾が求むるものは、わが領分の半に至るとも、爾に與へんと誓ふ。女いでて、その母に何を求ふべき乎と曰ひければ、母乃ちパプテスマのヨハネが首と曰へり。女ただちに急ぎ王にきたり、求うてパプテスマのヨハネが首を盆に載せて即時に我に賜へと曰ふ。王甚だ愛へけれども、既に誓ひたると、同席の者の故とをもて、これを拒むことをこのまじ。王ただちに、ヨハネの首を持ち來れと命じて、兵卒を遣しければ、彼ゆきて獄に於てこれ

を斬り、その首を盆にのせ持ち來りて、女に與ふ。女はこれをその母に與へたり。」とある。フロベールの「三短篇」に收められた「エロディアス」(一八七七)はこの説話を小説化したものである。しかし、聖書の中には、上掲の如く、ヘロデヤの娘サロメはその名を記されてゐない。また、フロベールの小説に於ても、サロメは主要人物ではなく、ヨハネに對するサロメの戀も全然見られぬ。中世以來サロメの戀を取扱つた作品も他に必ずしも少くはないにしても、ワイルドの戯曲がこの傳説に全くワイルド獨特の思想と色彩と音楽とを與へたものであることは否定し得ない。この一小篇はオズカー・ワイルドの最傑作であるのみならず、唯美主義の一代代表作として作者の名を後代に傳へるに足るであらう。

ピアヅリーの「サロメ」の挿畫はワイルドの作の忠實な圖解ではなく、それに暗示を得て黒と白とで創造した比類のない怪奇な悪魔主義的藝術として有名である。オーブリー・ヴィンセント・ピアヅリー(一八七二—一八九八)はイングランド南海岸のブライトン市に生れ、幼時から呼吸器の病に悩み、ロンドンに出て二十歳頃から文學書の挿畫を描き始め、その特異な畫風によつて忽ち毀譽褒貶の渦を巻き起した。「サロメ」の刊行後、雑誌「イェロー・ブック」、  
「サヴァイ」等に個性的な表紙、表題紙等の圖案と挿畫とを描き、詩、散文をも發表し、當時の新藝術運動の中心人物の一人であつたが、痼疾次第に募つて、フランス南海岸の保養地マン

トンに於て數へ年二十七歳にして夭折した。「サロメ」の畫は、その奇拔な著想、怪奇化され  
た畫材、悽愴の鬼氣、巧緻な線描、黒と白との潑刺たる驅使、等々を以てこの世紀末的病奇才  
畫家の名作であり、當時原作をして益々論議の對象たらしめたのであつた。

「サロメ」の本文には版によつて多少の異同が見られる。本書は、メッシュエン社版「オスカ  
ー・ワイルド著作集」中のフランス語原文に據り、それに他の諸版にある二箇處の短いト書を  
加へて、譯したものである。尙、挿畫として、一九〇七年刊の英譯書から、ピアヅリーの畫を、  
その表紙畫と表題紙の畫と目次頁の畫とを除いて、十三枚複製した。

序

本譯篇に於ても、原文中の固有名詞の讀み方をその各の原語讀み乃至はフランス語讀み英語  
讀み等に全部統一することは、習慣上（殊に臺詞としては）困難であつた。故に、人名はすべ  
て大體フランス語讀みを採つたが、地名は、ユダヤ、ギリシア等の如く既に廣く一般的に慣用  
されてゐるものが特に多いために、大體に於て各の慣用的の發音に従ふこととした。

一九三六年一月

佐々木直次郎

### 目次

序……………三

サロメ……………一一

註……………一一九

ビアヅリー挿畫目次

一、月の中の女……………一七

二、孔雀のスカート……………面三六

三、黒いケープ……………三九

四、ヨカナーンとサロメ……………四五

五、プラトニックな悲歎……………五一

六、エロディアス登場……………五七

七、エロドの眼……………八一

八、サロメの化粧……………面九四

九、サロメの化粧……………九七

一〇、腹の舞踏……………一〇一

一一、踊手の報酬……………面一〇四

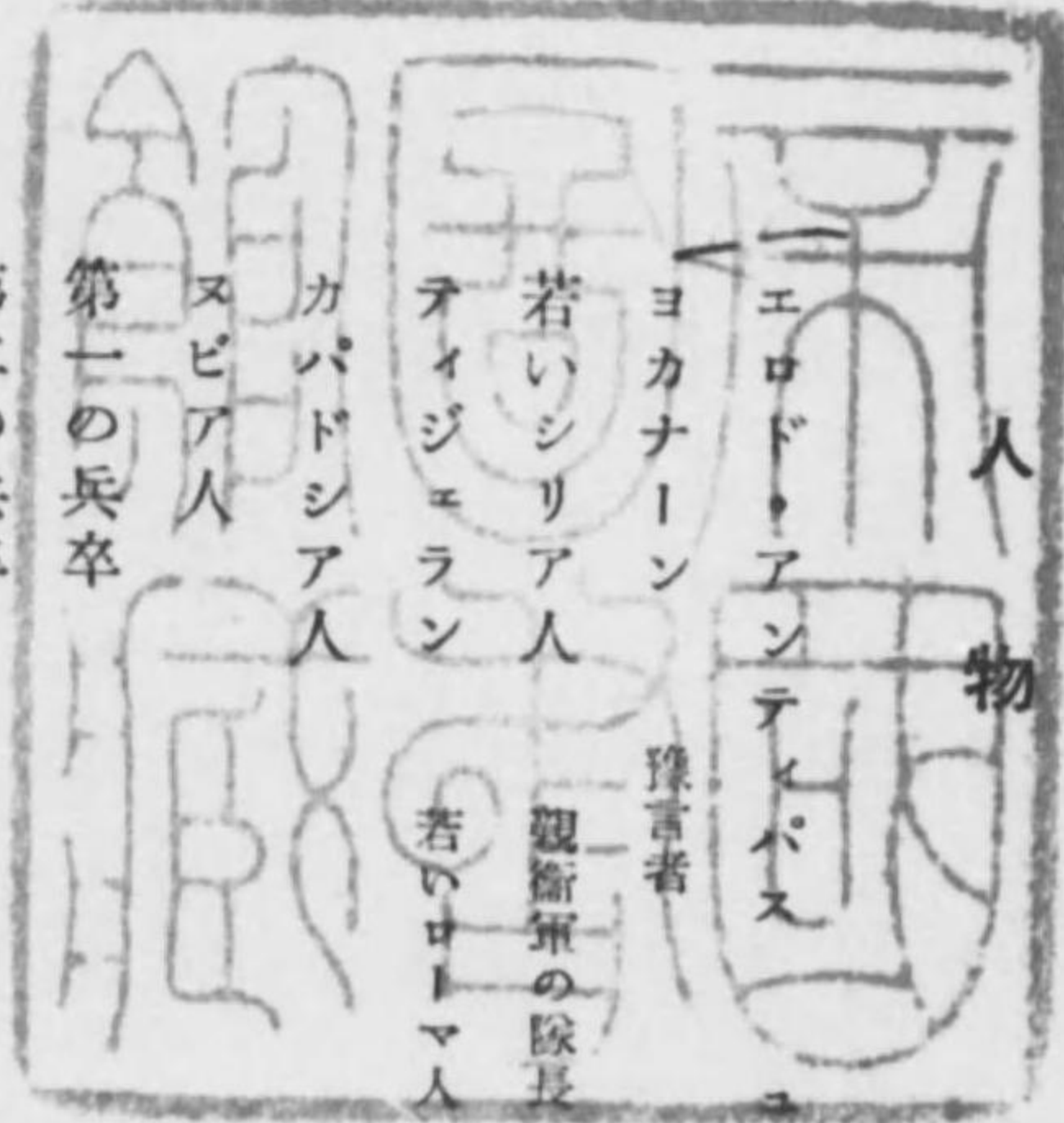
一二、最高潮……………面一〇六

一三、餘白裝飾畫……………一一八

サロメ

一幕の劇





エロド・アン・テ・パス

豫言者

観軍の隊長

若いローマ人

カバドシア人

スビア人

第一の兵卒

第二の兵卒

エロディアスの侍童

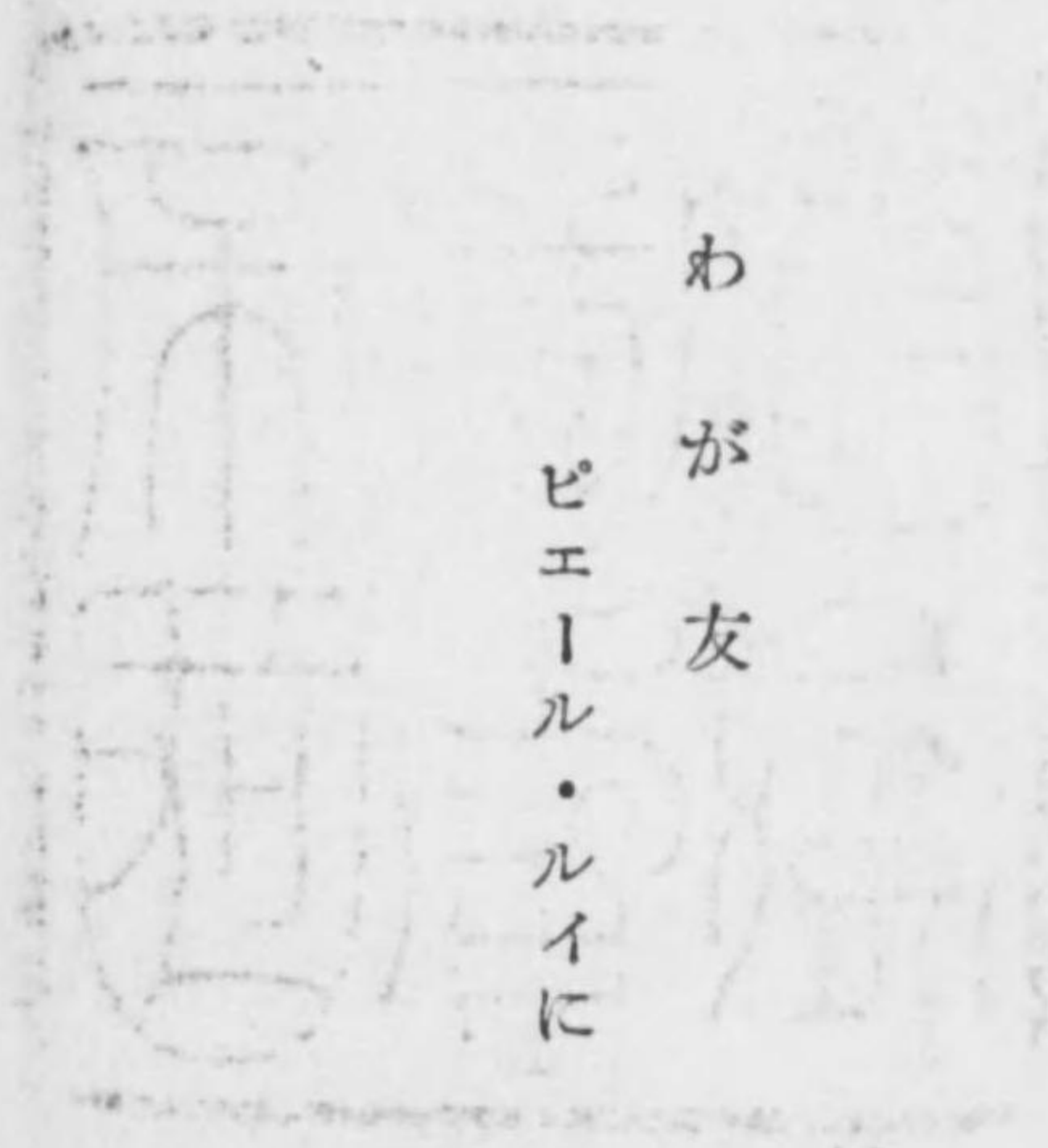
ユダヤ人たち、ナザレ人たち、その他

奴隷

ナーマン 斬首刑吏

わが友

ピエール・ルイに



エロディアス★ 分封の王の妃  
 サロメ エロディアスの娘  
 サロメの女奴隷たち



舞臺

〔舞臺の廣間に面してゐる、エロド王の宮殿内の廣大な臺地。<sup>テラス</sup>兵卒たちが露臺に倚りかかつてゐる。右手に、巨大な階段がある。左手、奥に、緑色の青銅の井筒をつけた古い用水溜。月光。〕

サ 若いシリア人

サロメ王女さまは今夜は何と美しいのだらう！

ロ エロディアスの侍童

あの月を御覽なさい。あの月はいかにも變な様子をしてゐます。墓穴はかあなの中から出て來た女のやうだ。あれは死んだ女に似てゐる。あれは死人しびとを探し求めてでもゐるやうだ。

若いシリア人

あれはいかにも變な様子をしてゐる。黄ろい面紗かづきをかぶつて、銀の足をした、小さい王女に似てゐる。小さな白い鳩のやうな足をした王女に似てゐる。……………あれは舞踏でもしてゐるやうだ。

15 エロディアスの侍童

あれは死んだ女のやうです。極くゆつくりと動いてゆく。

〔饗宴の廣間にてやかましき人聲。〕

第一の兵卒

何といふ騒ぎだ！ あの吠えてゐる野獸けものどもは何者だい？

第二の兵卒

ユダヤ人さ。奴らはいつでもああなのだ。自分たちの宗旨のことで言ひ争つてゐるのだよ。

第一の兵卒

なぜ奴らは自分たちの宗旨のことで言ひ争つたりするのだらう？

第二の兵卒

己おれにはわからぬ。が奴らはいつでもああやつてゐるのだ。………例へば、パリサイ派の者は天使といふものはあると言へば、サドカイ教の者は天使などといふものはゐないと言ふ。

第一の兵卒

そんな事を言ひ争ふなんて馬鹿馬鹿しいと己おれは思ふがな。

若いシリア人

サロメ王女さまは今夜は何と美しいのだらう！



月の夜の女

エロディアスの侍童

あなたはあの方ばかり見てお出でです。あなたはあの方をあんまり見過ぎます。人をそんな風に見るものではありません。………何か悪い事が起るかも知れない。  
若いシリア人

あの方は今夜は實に美しい。

サ

第一の兵卒

王さまは陰気なお顔をしてをられる。

ロ

第二の兵卒

さうだ、陰気なお顔をしてをられる。

メ

第一の兵卒

何かをぢつと見てをられる。

第二の兵卒

誰かをぢつと見てをられる。

第一の兵卒

誰を見てをられるのだらう？

## 第二の兵卒

己にはわからぬ。

若いシリア人

王女さまは何と蒼いお顔をしてをられるのだらう！ あんなに蒼いお顔をしてをられるのはこれまでに一度も見たことがない。銀の鏡に映つた白薔薇のやうだ。

エロディアスの侍童

あの方を見てはいけませぬ。あなたはあの方をあんまり見過ぎますよ！

第一の兵卒

エロディアスさまが王さまのお杯に酒をお注ぎになつた。

カバドシア人

あれがお妃のエロディアスさまかな、眞珠をちりばめた黒い冠をかぶつて、髪の毛に青い粉をつけてをられるあの方が？

第一の兵卒

さうさ、あれがエロディアスさまだ。あれが王さまのお妃さまだよ。

第二の兵卒

王さまは葡萄酒が大層好きだ。三通りの葡萄酒を持つてお出でになる。一つはサモトラキアの島から来るもので、ローマ皇帝の袍衣のやうに眞紅の色をしてゐる。

カバドシア人

己はまだローマ皇帝を見たことがないよ。

第二の兵卒

今一つはキプロスの町から来るもので、金のやうに黄ろい色をしてゐる。

カバドシア人

己は金が大好きなのだ。

第二の兵卒

それからもう一つのはシシリーの葡萄酒だ。その葡萄酒は血のやうに赤い色をしてゐる。

ヌビア人

己の國の神さまたちは血が好物なのだ。年に二度づつ己たちはその神さまたちに若い男と處女とを生贄に供へる。若い男を五十人と處女を百人だ。だが、それでもまだお供物がどうも十分ではないらしい。神さまたちは己たちにずるぶんつらくお當りになるからな。

カバドシア人

己の國には今ぢやあ神さまたちはゐないよ。ローマ人が追ひ出してしまつたのさ。山の中に隠れてお出でになるのだと言ふ者もあるが、しかしそれは己にはほんたうとは思へぬ。己は自分で山で三晩も明かして何處も此處も探し廻つてみた。が見つからなかつた。で、たうとうしまひには、神さまたちの名前を呼んでみたが、それでも出てお出でになりはしなかつた。神さまたちは死んでしまはれたのだらうと己は思ふ。

第一の兵卒

ユダヤ人たちは眼に見えない一人だけの神さまを拜んでゐるぜ。

カバドシア人

己にはそんなことは合點がゆかぬな。

第一の兵卒

何にしても、奴らは眼に見えないものだけしか信じないのだ。

カバドシア人

そんなことは己には全く馬鹿げたことのやうな氣がするなあ。

ヨカナーンの聲

わしの後からわしよりも更に力ある者が來るであらう。わしはその人の靴の紐を解くにも

足りぬ者だ。その人が來る時には荒れ果てた地も喜び立つであらう。百合のやうに花開くであらう。盲ひたる者の眼も日の光を見るであらうし、聾ひたる者の耳も物の音を聞くであらう。………嬰兒も龍の窟（イヒヤ）にその手を置くであらうし、獅子の鬣（ヒゲ）をとつて牽いてゆくであらう。

第二の兵卒

あいつを黙らせる。奴はいつも途方もない事ばかり言つてゐる。

第一の兵卒

いやいや。あれは聖者だ。それに極くおとなしい男だ。毎日己はあの男に食物を持つて行つてやる。するとその度にあの男は己に禮を言ふのだ。

カバドシア人

あれは何者だい？

第一の兵卒

豫言者だよ。

カバドシア人

名前は何と言ふのだ？

第一の兵卒

ヨカナーン。

カバドシア人

何處から来たのだ？

第一の兵卒

沙漠から来たのだ。その沙漠では、あの男は蝗蟲いなこと野蜜のみとを食つて生きてゐたのだ。来た時には、駱駝の毛皮を著て、腰には革の帯を締めてゐた。ずるぶん恐しい様子をしてゐた。大勢の者があの男の後からついて来た。中には弟子だといふ者さへゐたよ。

カバドシア人

あの男は何のことをしやべつてゐるのだい？

第一の兵卒

已たちにはとてもわからぬ。時々はぞつとするやうな事を言ふことがあるが、しかしあの男の言ふことを會得することは出来ない。

カバドシア人

その男を見られるのかい？

第一の兵卒

いいや。王さまがお許しにならないのだ。

若いシリア人

王女さまがお顔を扇でお隠しになつたぞ！ 小さな白いお手が鳩小舎へと飛んでゆく鳩のやうにひらひらしてゐる。あの手は白い蝶々に似てゐる。全く白い蝶々のやうだ。

エロディアスの侍童

でも、それがあなたにどうだといふのです？ なぜあの方をぢつと見てゐるのです？ あの方を見てはいけません。……………何か悪い事が起るかも知れない。

カバドシア人〔用水溜を指して〕

何て不思議な牢屋だらうなあ！

第二の兵卒

あれは古い用水溜だよ。

カバドシア人

古い用水溜だと！ それぢやあ體からだにはずるぶん悪いに違ひないな。

第二の兵卒

さうでもないよ。例へばな、王さまのお兄上さまで、お妃のエロディアスさまの先の夫であつた方などは、あの中に十二年も押しこめられてゐなすつた。それでも死なれはしなかつたのだ。で、たうとう、仕方がなくて縊り殺されてしまはれたよ。

カバドシア人

縊り殺す？ そんなことを誰が出来たのだい？

サ

第二の兵卒 「大男の黒人の斬首刑吏を指して」

あの男さ。ナーマンだ。

ロ

カバドシア人

あの男は怖くはなかつたのかな？

メ

第二の兵卒

いいや。王さまがあつた男に指環をお渡しになつたのだ。

カバドシア人

何の指環だ？

第二の兵卒

死の指環だ。それであの男は怖くはなかつたのだ。

カバドシア人

それにしても、王さまを縊り殺すなんて恐いことだなあ。

第一の兵卒

なせさ？ 王さま方だつて、他の人間と同じに、首は一つだけだ。

カバドシア人

己には恐いことのやうな気がするよ。

サ

若いシリア人

おや、王女さまがお立ちになつたぞ！ 食卓をお離れになつた！ よほどお厭な御様子だ。

ロ

ああ！ こちらへお出でになる。さうだ、我々の方へお出でになる。何とお顔が蒼いのだらう。あんなに蒼いお顔をしてお出でになるのはこれまでに見たことがない。……………

メ

エロディアスの侍童

あの方を見ないで下さい。お願いですから見ないで下さい。

若いシリア人

あの方は途に迷つた鳩のやうだ。……………あの方は風に震へてゐる水仙のやうだ。……………

…あの方は銀の花に似てゐる。



「サロメ登場する。」

サロメ

わたしはあすこにはあつたたくない。あすこにはあつたたくない。どうして王さまはあのぶるぶる震へてゐる臉の下から土龍のやうな眼でしよつちゆうわたしを見てお出でなのであらう？  
 ……………わたしのお母さまの夫である人があんな風になつたしを見るといふのは變なことだ。あれはどういふ譯なのかわたしにはわからない。……………いや、詮じつめれば、わかつてゐるのだが。

若いシリア人

御饗宴の席をおはづしになりましたか、王女さま？

サロメ

まあ、この空氣の清々してゐること！ ここへ来てやつと息が出来る！ あの中には、自分たちの宗旨の馬鹿げた儀式のことで喧嘩し合つてゐるエルサレム生れのユダヤ人たちもゐれば、飲み續けて葡萄酒を鋪石にこぼしてゐる野蠻人ももゐる。眼を隈どり頬を彩り、ちぢれた髪の毛をくるくる巻いてゐるスミルナ生れのギリシア人たちもゐれば、無口で、こすくて、硬玉のやうな爪をして、藍色の上衣を著てゐるエジプト人ももゐるし、無骨で、

無作法で、下品な言葉を使ふローマ人たちもゐる。ああ！ あのローマ人どもの厭らしいこと！ 並の人間のくせに、貴人のやうな風をしてゐる。

若いシリア人

お掛けになりませぬか、王女さま？

エロディアスの侍童

なぜあの方に口を利くのです？ なぜあの方をおつと見てゐるのです？ ……………おお！ やがて何か悪い事が起るだらう。

ロ

サロメ

月を見てゐるのは何とない氣持だらう！ あれは小さな銀貨に似てゐる。極く小さな銀の花のやうだ。月は冷くて淨らかだ。……………きつとあれは處女なのだらう。處女の美しさがある。……………さうだ、月は處女だ。あれは一度も身を汚したことがないのだ。他の女神たちのやうに男に身を任せたいことはないのだ。

ヨカナーンの聲

主は來られたぞ！ 人の子は來られた。半人半馬らは河の中に身を隠し、人魚らは河を去つて森の中の樹の葉の下に臥してゐる。

サロメ

あんなことを喚くのは誰だえ？

第二の兵卒

あれは豫言者でございます、王女さま。

サロメ

ああ！ 豫言者だと。では王さまが怖がつてお出でになるあの人がかえ？

第二の兵卒

わたくしどもはそのことは一向に存じませぬ、王女さま。あれは豫言者ヨカーンでございます。

メ

若いシリア人

お輿こしを運ばせて参りますやうに申しつけませうか、王女さま？ お庭では大層夜が綺麗でございます。

サロメ

あの人はわたしの母上のことについて恐い事を言ふさうではないか？

第二の兵卒

あの男の申しますことはわたくしどもにはとんとわかりませぬ、王女さま。

サロメ

さうだよ、あの人は母上について恐い事を言ふのだ。

〔奴隷登場する。〕

奴隷

王女さま、御饗宴の席にお戻り遊ばしますやうにとの王さまの仰せでございます。

サロメ

わたしはあそこへは戻らないよ。

若いシリア人

畏れながら、王女さま、もしお戻り遊ばしませぬと何か禍が起るやも知れませぬ。

サロメ

その豫言者は年寄かえ？

若いシリア人

王女さま、お戻り遊ばしました方がよろしいやうでございます。わたくしにお見送りさせて下さいまし。

サロメ

その豫言者は………その男は年寄かえ？

第一の兵卒

いいえ、王女さま、極く若い男でございます。

第二の兵卒

それはわかりませぬ。あれはエリー<sup>★</sup>だと申す者もをりますのですから。

サロメ

エリーとは誰だえ？

第二の兵卒

ずつと昔この國にをりました豫言者で、王女さま。

奴隷

王さまへは王女さまの御返事を何と申し上げましたらよろしいでございますか？

ヨカナーンの聲

パレスティナの國よ、爾<sup>いんち</sup>を打つた者の筈<sup>くわ</sup>が折れたとて喜ぶなよ。なぜならば、蛇の種族からは怪蛇<sup>ガシラツク</sup>が出て、それから生れたものが鳥をも喰ふであらうから。

サロメ

まあ、何と不思議な聲だらう！ わたしはあの男と話をしてみたい。

第一の兵卒

それはどうもむづかしいかと存じます、王女さま。王さまは誰にもあの男と話をすることをお許しになりませぬ。大司祭にさへもあの男と話をすることをお差止めになつてをられます。

サロメ

わたしはあの男と話がしたい。

第一の兵卒

それは出来ませぬ、王女さま。

サロメ

わたしは話がしたいのだ。

若いシリア人

ほんたうに、王女さま、御饗宴の席にお戻り遊ばしました方がよろしいやうでございます。

サロメ

豫言者を出して来なさい。

〔奴隷退場する。〕

第一の兵卒

わたくしどもには出来ませぬ、王女さま。

サロメ 「用水溜に歩み寄りその中を覗き込んで」

この中は何て眞暗なんだらう！ こんなに暗い穴倉の中にあるのはさぞ恐しいことだらう！ まるで墓穴のやうだ。…………… 「兵卒らに。」 わたしの言つたことが聞えなかつたのかえ？ あの男を出して来なさい。わたしはあの男に會ひたいのだ。

第二の兵卒

どうぞ、王女さま、わたくしどもにそんなことをお言ひつけにならないで下さいまし。

サロメ

お前たちはわたしを待たせるねえ。

第一の兵卒

王女さま、わたくしどもの命はあなたさまに捧げてございます。しかし今お言ひつけになりましたことはわたくしどもにはすることが出来ませぬ。……………つまり、あなたさまがそ

れをお言ひつけなさるべき者はわたくしどもではございませぬ。

サロメ 「若いシリア人を見て」

ああ！

エロディアスの侍童

おお！ どうなることだらう？ きつとやがて何か悪い事が起るだらう。

サロメ 「若いシリア人に近づいて」

お前はわたしのために今のことをしてくれるだらうねえ、ナラボ？ お前はわたしのためにしてくれるね？ わたしはいつもいつもお前にはやさしくしてやつたのだよ。お前はわたしのために今のことをしておくれでないかえ？ わたしはただあの不思議な豫言者を見たいだけなのだよ。あの男のことではいろいろ噂がある。わたしは王さまがあの男のことをお話になるのも度々聞いたことがある。どうも王さまはあの男を怖がつてお出でのやうに思ふ。きつとあの男を怖がつてお出でに違ひない。……………お前もやはり、ナラボや、お前もやはりあの男が怖いのかえ？

若いシリア人

わたくしはあの男を怖がつてなぞをりませぬ、王女さま。わたくしは誰をも怖がつてはを



りませぬ。しかし王さまが何人なりともこの井戸の蓋を揚げてはならぬと厳しく仰せられま  
したのでございます。

サロメ

お前はわたしのためにおくれだらうね、ナラボ。さうすれば、明日わたしが輿に乗つ  
てあの偶像賣の門の下を通る時に、お前のために小さな花を落してあげよう、小さな緑色の  
花を。

若いシリア人

王女さま、わたくしには出来ませぬ、わたくしには出来ませぬ。

サロメ 「微笑みながら」

お前はわたしのためにおくれだらうね、ナラボや。お前がわたしのためにしてくれる  
といふことをお前はよく知つてゐるねえ。さうすれば、明日わたしが輿に乗つてあの偶像買  
の橋を渡る時に、お前を輕羅の面紗越しに見てあげよう。わたしはお前を見てあげようよ、  
ナラボや。ことによつたらお前に笑つてみせてあげるかも知れないよ。わたしを御覽、ナラ  
ボや。わたしを御覽。ああ！ お前がわたしの頼むことをしようとしてゐるといふことをお  
前はよく知つてゐるのだよ。お前はよく知つてゐるねえ？ ……わたしもそれはよく知



お前がわたし

つてゐるよ。

若いシリア人 「第三の兵卒に合圖をして」

豫言者を出して来い。……………サロメ王女さまが會ひたいと仰せられる。

サロメ

ああ！

エロディアスの侍童

おお！ 月は何と變な様子をしてゐるだらう！ 屍衣をわが身にかけてようとしてゐる死

ロ

んだ女の手のやうだ。

メ

若いシリア人

あれはいかにも變な様子をしてゐる。琥珀の眼をした小さな王女のやうだ。輕羅の雲越しに小さな王女のやうに微笑んでゐる。

〔豫言者用水溜から出て来る。サロメ彼を眺めて後しざりする。〕

ヨカナン

忌はしい所業を盛れる杯の既にみたされてゐる男は何處にゐる？ いつか銀の衣を著てすべての人々の前で死すべき男は何處にゐる？ その男にここへ来いと言へ。曠野の中でも王

宮の裡でも叫んだ者の聲を聞かせてやる。

サロメ

誰のことを言つてゐるのだらう？

若いシリア人

誰にも決してわかりませぬ、王女さま。

ヨカナーン

壁に描かれた男たちを見て、繪具で描かれたカルデア人の男たちの繪姿を見て、己が眼の色慾に身を委ね、カルデアの國に使者を送つた女は何處にゐる？

サロメ

あれはわたしのお母さまのことを言つてゐるのだ。

若いシリア人

そんなことはございませぬ、王女さま。

サロメ

いや、わたしのお母さまのことだ。

ヨカナーン



黒いケープ

腰に飾帯をかけ、頭にはさまざまの色の冠をかぶつたアッシリア人の隊長たちに身を任せ、た女は何處にゐる？ 亞麻リネンと風信子石ヒヤシンスとに身を装よそひ、金の楯に銀の兜をつけ、大きな體からだをしたエジプトの若者たちに身を任せた女は何處にゐる？ その女に、淫亂の寢床から、近親相姦の寢床から起きて来いと言へ。主の道を開く者の言葉を聞かせてやる。さうすれば己が罪過を悔い改めるであらう。よし悔ひ改めずして、己が忌はしい所業の中に止とどまるであらうとも、その女にここへ来いと言へ。主はその御手みでに禍を加へる棒を持つてをられるぞ。

サロメ

ほんとにあの男は恐しい、あの男は恐しい。

若いシリア人

お願いでございますから、王女さま、ここにお出でなさいますな。

サロメ

恐しいのはわけてもあの眼だ。ティロスの綴織つづりに松明で焼き抜いた黒い穴のやうだ。龍ドラゴンの棲む黒い洞窟ほら、龍が隠家かくれがとするエジプトの黒い洞窟のやうだ。氣まぐれな月に擾みだされてゐる黒い湖のやうだ。……………あの男がまだ何か言ふとお前は思ふかえ？



ここにお出でなさいますな、王女さま！ お願ひでございますからここにお出でなさいますな。

サロメ

それにあの男の瘦せてゐること！ まるで象牙細工のほつそりした像のやうだ。銀の像のやうだ。きつとあの男は月のやうに淨らかなのだらう。あの男は銀の光のやうだ。あの男の肌は象牙のやうに冷いに違ひない。………わたしはあの男を近よつて見たい。

若いシリア人

いけませぬ、いけませぬ、王女さま！

サロメ

わたしはあの男を近よつて見なければならぬ。

若いシリア人

王女さま！ 王女さま！

ヨカナーン

わしを見てゐるこの女は誰だ？ わしはこの女に見て貰ひたくない。なぜこの女は金色の陰かげの下したの金の眼でわしを見るのだ？ わしはこれが誰であるか知らない。それを知りたいと

は思はぬ。この女に向ふへ行けと言へ。わしの話をしたのはこの女ではない。

サロメ

わたしはエロディアスの娘、ユダヤの王女、サロメだよ。

ヨカナーン

さがれ！ バビロンの娘！ 主に選ばれた者に近よるな。お前の母はその不義の酒で地上をみたしたのだ。その罪業の叫びは神のお耳にも聞えてゐるぞ。

サロメ

もつと言つておくれ、ヨカナーン。お前の聲はわたしを酔はせる。

若いシリア人

王女さま！ 王女さま！ 王女さま！

サロメ

ほんともつと言つておくれ。もつと言つておくれ、ヨカナーンや。わたしがどうしたらいいのか話しておくれ。

ヨカナーン

わしに近よるな、ソドムの娘★。御身おんみは面纱かづきで顔を隠し、頭に灰をふりかけて、沙漠に人の

子を探し求めに行くがよい。

サロメ

その人の子といふのは誰のことだえ？ その男もお前のやうに美しいのかえ、ヨカナーン？

ヨカナーン

さがれ！ さがれ！ わしにはこの宮殿の中に死の天使の羽ばたきの音が聞えるぞ。

若いシリア人

王女さま、どうぞ中へお入り下さいまし！

ヨカナーン

主なる神の御使よ、そなたはその剣をもつてここで何をなされますか？ このけがらしい宮殿の中で誰を探し求めてをられますか？ ……銀の衣を著て死すべき者の日はまだ来てみませぬのに。

サロメ

ヨカナーン！

ヨカナーン



ヨカナーンとサロメ  
(278)

口を利くのは誰だ？

サロメ

ヨカナーンや！ わたしはお前の體からだに戀こひひ焦こがれてゐるのだよ。お前の體は、草刈人がまだ一度も鎌を入れたことのない草原の百合のやうに白い。お前の體は、山々に降り積る雪のやうに、ユダヤの山々に降り積つて谷間を下くだつて來る雪のやうに白い。アラビアの女王の園に咲く薔薇も、お前の體ほどには白くない。アラビアの女王の園に咲く薔薇も、草葉の上を踏み歩く曉あけぼのの足も、海原うきはらの胸の上にやすむ時の月の胸も、それほどには白くない。……この世の中にはお前の體ほどに白いものは何一つないのだ。——お前の體からだに觸ふらせておくれ！

メ

ヨカナーン

さがれ、バビロンの娘！ この世に惡が來たのは女人のためだ。わしに口を利いてくれるな。わしはお前の言ふことを聽きたくない。わしの聽くのは主なる神のお言葉ばかりだ。

サロメ

お前の體はいやらしい。癩病かびみの體のやうだ。蝮蛇まじしの這つてゐる漆喰しつこの壁のやうだ。蝸かたがひが巢をつくつてゐる漆喰の壁のやうだ。中には忌はしいものが一杯入つてゐる、白く塗つた

墓のやうだ。氣味が悪い。お前の體は氣味が悪い！……………わたしの戀ひ焦がれてゐるのはお前の髪の毛だよ、ヨカナーン。お前の髪の毛は葡萄の房に似てゐる。エドム人の國のエドムの葡萄の木に下つてゐる黒い葡萄の房に似てゐる。お前の髪の毛はレバノンの山の杉のやうだ。獅子や山賊が晝の間身を隠さうとするほどの樹影のあるレバノンの山の杉のやうだ。永い闇の夜も、月が姿を現さず、星も恐れをのいてゐる夜も、それほどには黒くない。森の中に棲んでゐる沈黙もそれほどには黒くない。この世の中にはお前の髪の毛ほどに黒いものは何一つないのだ。……………お前の髪の毛に觸らせておくれ。

ヨカナーン

さがれ、ソドムの娘！ わしに觸るな。主なる神の殿堂を潰してはならぬぞ。

サロメ

お前の髪の毛は氣持が悪い。泥だらけ埃だらけだ。お前の額の上に載せられた荆棘の冠のやうだ。お前の頸の周りにとぐるを巻いてゐる黒い蛇の群のやうだ。わたしはお前の髪の毛は好かぬ。……………わたしが戀ひ焦がれてゐるのはお前の口だよ、ヨカナーン。お前の口は象牙の塔につけてある猩々緋の紐のやうだ。象牙の小刀で切つた柘榴の實のやうだ。ティロスの園に咲いてゐる、薔薇よりも赤いあの柘榴の花も、それほどには赤くない。王さまのお

出ましを知らせ、敵を怖がらせる喇叭の赤い音も、それほどには赤くない。お前の口は酒槽の中で葡萄を踏んでゐる者たちの足よりも赤い。神殿に棲んでゐて司祭たちに養はれてゐる鳩の足よりも赤い。森の中で獅子を殺し金色の虎を見てそこから出て來た男の足よりも赤い。お前の口は、漁師が海の薄明りの中で見つけ出して、王さまにたてまつるために取つておく珊瑚の枝のやうだよ！……………モアブ人がモアブの鑛山で見つけ出して、王さまに賣る辰砂のやうだ。辰砂で彩つて、珊瑚の弓箭をつけた、ペルシアの王さまの弓のやうだ。この世の中にはお前の口ほどに赤いものは何一つない。……………お前の口に接吻させておくれ。

ヨカナーン

ならぬ！ バピロンの娘！ ソドムの娘！ ならぬ。

サロメ

わたしはお前の口に接吻するよ、ヨカナーン。わたしはお前の口に接吻するよ。

若いシリア人

王女さま、王女さま、ミルラの茂みのやうなあなたが、鳩の中の鳩であるあなたが、この男を御覽なさいますな、御覽なさいますな！ この男にそのやうなことを仰せられますな。わたくしにはそのやうなことは我慢が出來ませぬ。……………王女さま、王女さま、そんなこ

とを仰せられますな。

サロメ

わたしはお前の口に接吻するよ、ヨカナン。

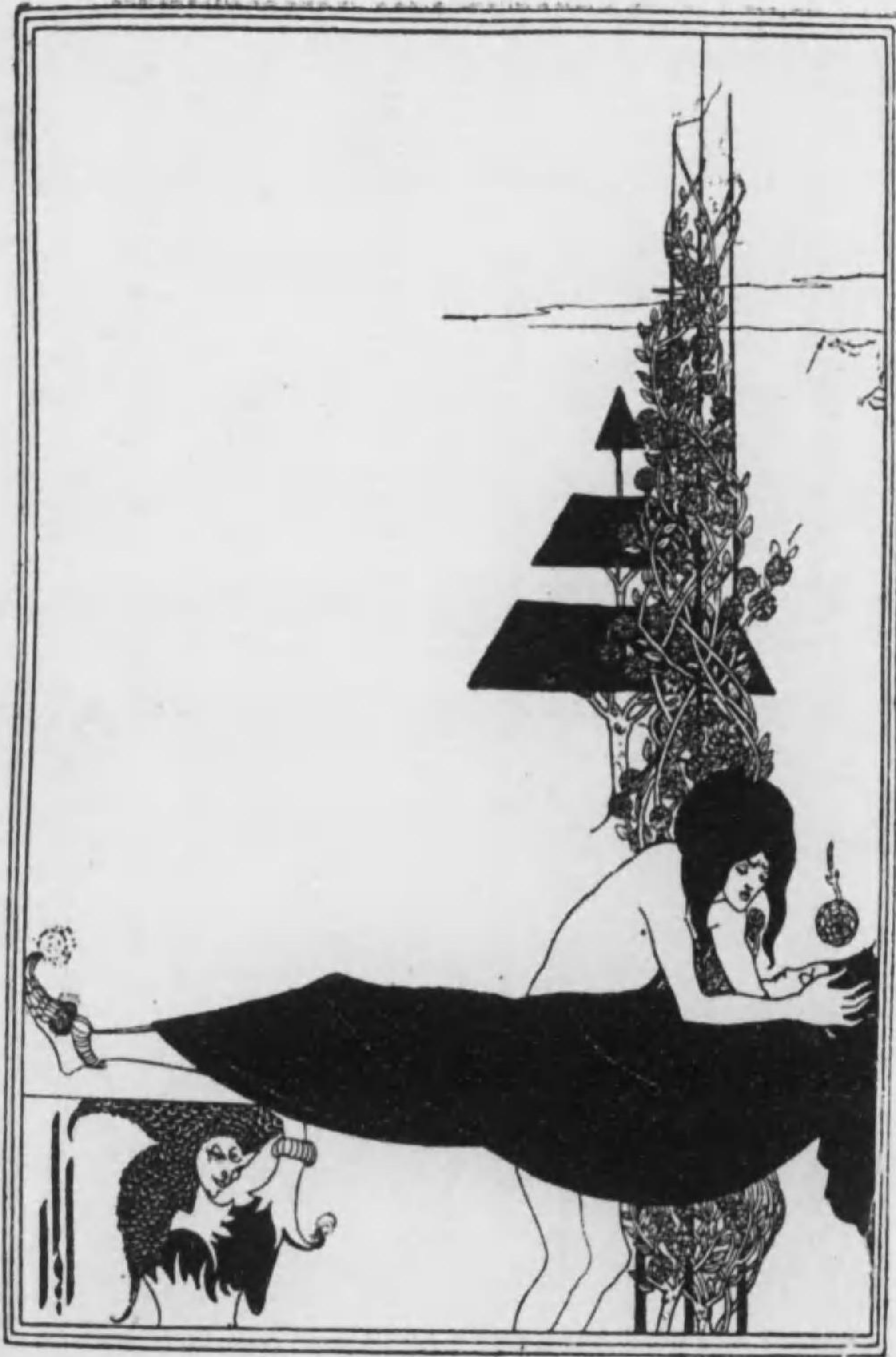
若いシリア人

ああ！

〔彼は自殺してサロメとヨカナンとの間に倒れる。〕

エロディアスの侍童

あの若いシリア人が自殺した！ 若い隊長が自殺した！ わたしの友達であつたあの人が自殺した！ わたしはあの人に小さな香料の箱と、銀で作つた耳環とをやつたが、もうその人は自殺してしまつた！ ああ！ あの人はやがて何か禍が起るだらうと豫言してゐたではないか？ ……わたしもさう豫言してゐたのだが、それが起つたのだ。今夜のあの月が死人を探し求めてゐたといふことはわたしはよく知つてゐたが、しかしその月の探し求めてゐたのがあの人であらうとは知らなかつた。ああ！ なぜわたしはあの人を月に見られぬやうに隠しておいてやらなかつたのだらう？ どこかの洞穴ほらなの中にでも隠しておいてやつたら、月はあの人を見なかつたらうに。



第一の兵卒

王女さま、若い隊長が自殺なされました。

サロメ

お前の口に接吻させておくれ、ヨカナーンや。

ヨカナーン

サ  
御身は怖くはないのか、エロディアスの娘よ？ わしはこの宮殿の中に死の天使の羽ばた  
きの音が聞えると御身に言つたが、その天使が來られたではないか？

ロ  
サロメ

お前の口に接吻させておくれ。

メ  
ヨカナーン

姦淫の生んだ娘よ、お前を救ふことの出来る人は一人だけしかをられない。それはわしが  
さつきお前に話してやつたあの人だ。その人を探し求めに行くがよい。その人は今ガリラヤ  
の海に浮んでゐる小舟の中にある、その弟子たちに話してをられる。御身はその海の岸に跪  
いて、その人の名を呼ぶがよい。その人は何人なりとも名を呼ぶ者のところへ來られるのだ。  
その人が御身のところへ來られたならば、御身はその人の足もとにひれ伏して、御身の罪業

のお救しをお願ひするがよい。

サロメ

お前の口に接吻させておくれ。

ヨカナン

呪はれてあれ、近親相姦の母から生れた娘よ、呪はれてあれ。

サロメ

わたしはお前の口に接吻するよ、ヨカナン。

ロ

ヨカナン

わたしはお前を見たくない。わたしはお前をもう見ない。お前は呪はれてをるぞ、サロメ、お前は呪はれてをるぞ。

メ

〔彼は用水溜の中へ降りて行く。〕

サロメ

わたしはお前の口に接吻するよ、ヨカナン、わたしはお前の口に接吻するよ。

第一の兵卒

あの死骸を他所へ持つて行かせねばならぬ。王さまは、御自分でお殺しなされた者の死骸

の他は、死骸を御覽になることはお嫌ひだから。

エロディアスの侍童

あの人はわたしの兄弟だつた。兄弟よりも親しかつた。わたしはあの人にいろいろの香料の入つてゐる小さな箱と、瑪瑙の指環とをやつた。その指環をいつもあの子は指に嵌めてゐた。夕方になるとわたしたちはよく川の岸や巴旦杏の樹の間を散歩し、あの子は自分の國のことを話してくれた。いつも極く低い聲で話してゐた。あの子の聲の音は笛を吹く人の笛の音に似てゐた。それからまた、あの子は川の水に映る自分の姿を見るのが大好きだつた。わたしはそんなことをするものではないとあの子に咎め立てをしたものだつた。

第二の兵卒

お前の言ふ通りだ。あの死骸を隠さねばならぬ。王さまにあれをお見せしてはならぬ。

第一の兵卒

王さまはここへはお出でになるまい。この臺地へ出てお出でになつたことは一度もないのだ。あの豫言者をずゐぶん怖がつてお出でになるからなあ。

〔エロド、エロディアス、及び全廷臣登場。〕

エロド

サロメは何處どこにゐる？ 王女は何處どこにゐる？ なぜあれはわしの言ひつけた通りに饗宴の席へ戻つて來なかつたのだ？ ああ！ あすこあそこにゐるな！

エロディアス

あればかり御覽なされてはなりません。あなたはいつもいつもあれを見つめてばかりをられますよ！

エロド

今夜は月がよほど不思議な様子をしてゐる。月はいかにも不思議な様子をしてゐるではないか？ 氣の違つた女のやうだ。何處にでも戀人たちを探し廻つてゐる氣の違つた女のやうだ。あれはそれに裸だ。まる裸だ。雲があれに頻りに著物を著せようとしてゐるが、しかしあれは著たがらぬのだ。あれは酒に酔つた女のやうに雲の間をよるめいてゐる。……きつと戀人たちを探し求めてゐるのであらう。……あの月は酒に酔つた女のやうによるめいてゐるではないか？ あれは氣の違つた女に似てゐるではないか？

エロディアス

月は月に似てゐるだけでございます。中へ入りませう。……あなたはこんな處に何も御用はございません。



エロディアス登場！  
王女を要す、此の如く



エロド

わしはここにゐよう！ マナッセよ、そこに敷物を敷け。松明を點せい。象牙の卓子と、碧玉の卓子とを持つて来い。この空氣は心持がよい。わしは客人たちともつと酒を飲むとしよう。ローマ皇帝のお使者たちには出来るだけの款待をせねばならぬ。

エロディアス

あなたがここにお出でになるのはあの方たちのためではございますまい。

エロド

さうだ、この空氣は心持がよい。さあ、エロディアス、客人たちが待つてをられる。ああ！ 滑つた！ わしは血に滑つたぞ！ これは悪い前兆だ。これは非常に悪い前兆だ。なぜここに血が流れてゐるのだ？ ……してこの死骸は？ どうしてここにこの死骸が置いてあるのだ？ そちどもは、わしを、饗宴を開く度に客人たちに死骸を一つ見せぬことはないといふエジプト王のやうに思つてをるのか？ 一體、これは誰だ？ わしはこんなものを見たくない。

第一の兵卒

それはわたくしどもの隊長でございます、陛下。ほんの三日前に陛下が隊長になされました。

たあの若いシリア人でございます。

エロド

わしはあの男を殺せといふ命令などを出したことがないぞ。

第二の兵卒

あの人は自殺されたのでございます、陛下。

エロド

なぜだ？ わしはあの男を隊長にしてやつたのに！

第二の兵卒

わたくしどもにはわかりませぬ、陛下。しかしあの人は自殺をされたのでございます。

エロド

それはどうも不思議なことのやうだ。わしは、自殺をするのはローマ人の哲學者だけだと思つてゐた。ティージェラン、ローマの哲學者は自殺をするさうだな？

ティージェラン

中には自殺をする者もをります、陛下。それはストア學徒でございます。あれは極く粗野な連中でございます。つまり、極く馬鹿馬鹿しい連中でございます。わたくしは、あれらは

極く馬鹿馬鹿しい者どもだと思つてをります。

エロド

わしもさう思ふ。自殺をするといふことは馬鹿馬鹿しいことだ。

ティージェラン

ローマでは皆あれらのことを嗤つてをります。皇帝は彼等を嘲る諷刺の詩をお作りになりました。その詩を到る處で人々が唱つてをります。

エロド

ほほう！ 彼等を嘲る諷刺の詩をお作りになつたと？ まことにローマ皇帝は素晴らしい方だ。何でもお出来にならぬことはない。………だが、あのシリアの若者が自殺をしたのは不思議だ。惜しいことをした。さうだ、大層惜しいことをした。あれは美男だつたからな。なかなかの美男であつた。いかにも思ひに惱んだやうな眼をしてをつた。わしは、あの男が思ひに惱んだやうな風にサロメを見つめてゐたのを、見たことを覚えてゐる。ほんたうに、あの男はあれを少し見詰め過ぎると思つたくらゐだつた。

エロディアス

あれを見詰め過ぎる人は他にもまだございませう。

エロド

あの男の父は國王であつた。それをわしはその王國から追ひ出したのだ。そして、妃であつたあの男の母を、そなたは奴隷にしたのだよ、エロディアス。さういふ譯で、あの男は自分のやうにしてここにゐたのだ。また、わしがあの男を隊長にしてやつたのも、そのやうな譯があつたのだ。あの男が死んだとは惜しいことをした。……だが、なぜ死骸をここにそのままにして置くのだ？ 他所へ持つて行かねばいかぬ。わしはそれを見たうない。……持つて行け。「人々死骸を運び去る。」ここは寒い。ここには風がある。風があるではないか？

エロディアス

いいえ。風はございませぬ。

エロド

いやいや、そんなことはない。風がある。……それから、わしには空中に何だか羽ばたきのやうなものが聞える。途方もなく大きな翼の羽ばたきのやうなものが。そなたにはあれが聞えぬか？

エロディアス

わたくしには何も聞えませぬ。

エロド

もうわしにも聞えなくなつた。だがさつきは聞いた。あれは確かに風であつた。それが止んだのだ。いやいや、また聞えるぞ。そなたにはあれが聞えぬか？ あれは全く羽ばたきのやうだ。

エロディアス

何の音もしませぬと申しますのに。あなたはお體の工合がお悪いのです。中へ入りませう。

エロド

わしは病氣ではない。病氣なのはそなたの娘だ。あれはよほど工合が悪いやうな様子をしてゐる、そなたの娘はな。あれがあんなに蒼い顔をしてゐるのはこれまでに見たことがない。

エロディアス

あればかり御覽なされてはなりませんと申しましたのに。

エロド

酒を注いでくれ。「酒が運ばれる。」サロメ、ここへ来てわしと一緒に酒を少し飲んでくれ。ここに素敵にうまい葡萄酒がある。ローマ皇帝がこれをわしに送つて下さつたのだ。その中にそなたの小さな赤い唇を濕してくれ。さうすればその後でわしはその杯を飲み乾さう。

サロメ

わたくしは咽が渴いてはをりませぬ、王さま。

エロド

そなたはそなたの娘がわしにどう返答したか聞いたらう。

エロディアス

あれの申すことは尤もだと存じます。なぜあなたはいつもあれを見つめてばかりをられますか？

エロド

果物を持つて来い。「果物が運ばれる。」サロメ、ここへ来てわしと一緒に果物を食べてくれ。わしはお前の小さな歯で果物につけた齒形を見るのが好きだ。この果物をほんの小さな一片噛んでくれ。さうすればその後でわしは残りを食べよう。

サロメ

わたくしはお腹が空いてはをりませぬ、王さま。

エロド 「エロディアスに向つて」

そなたはそなたの娘をこんな風に躑けてあるのだなあ。

エロディアス

娘もわたくしも、王族の出でございます。あなたと來ては、あなたのお祖父さまは駱駝の番人でしたよ！ その上に、追剥でした！

エロド

嘘をつけ！

エロディアス

それがほんたうだといふことはよく御存じの筈です。

エロド

サロメ、ここへ来てわしの傍に掛けてくれ。お前のお母さまの御座をお前にやらう。

サロメ

わたくしは疲れてはをりませぬ、王さま。

エロディアス

あれがあなたをどう思つてゐるか、あなたにはよくおわかりになりましたでせう。

エロド

おい、あれを持つて……。わしは何を持つて来いと言ひつけるつもりであつたかな？

忘れたぞ。さう！ さう！ 思ひ出した……………。  
ヨカナーンの聲

時は来たぞ！ わしの豫言しておいたことが起つたと、主なる神が仰せられる。わしの話してゐた日は来た。

エロディアス

あれを黙らせて下さい。わたくしはあの男の聲を聞きたくありません。あの男は始終わたくしの悪口を吐いてをります。

ロ

エロド

あの男はそなたに悪いことなど何も言つてはをらぬ。それに、あれは非常に偉い豫言者だ。  
エロディアス

メ

エロディアス

わたくしは豫言者などといふものを信じませぬ。未來に起ることを人が言ふことが出来るなどといふことがございませうか？ 未來に起ることは誰にもわかりませぬ。それに、あの男は始終わたくしを侮辱してをります。でも、あなたはあの男を怖がつていらつしやるやうですね。……………いや、あなたがあの男を怖がつていらつしやることは、わたくしにはよくわかつてをります。

エロド

わしはあの男を怖がつてなぞをりはせぬ。わしは誰をも怖がつてはをらぬ。

エロディアス

いえいえ、あなたはあの男を怖がつていらつしやいます。もしあの男を怖がつてお出でになりませぬなら、ユダヤ人たちが六箇月も前からあの男を渡して下さいと頼んでをりますのに、なぜ渡しておやりになりませぬ？

サ

一人のユダヤ人

ほんたうに、陛下、あの男をわたくしどもお渡し下されました方がよろしうございませう。

ロ

エロド

そのことについては十分に申してある筈。わしはもうわしの返事をそちたちに聞かしてあるのだ。わしはあの男をそちたちに渡したくない。あれは神を見たことのある人間だ。

メ

一人のユダヤ人

さやうなことはある筈がございませぬ。豫言者エリーよりこのかた、誰一人神さまを見た者はをりませぬ。エリーが神さまを見られた最後の人でございます。今の時節では、神さまはお姿をお現しにはなりません。隠れてお出でになります。それ故に國の中に大きな禍があ

るのでございます。

別のユダヤ人

とにかく、預言者エリーがほんたうに神さまを見たのかどうかもわかりませぬ。ことによつたら、あの人の見ましたのは神さまの影であつたやも知れませぬ。

第三のユダヤ人

いやいや、神さまは隠れてお出でになるなどといふことは決してない。いつでも、またどんなものの中にも、お姿を現してお出でになるのだ。神さまは善の中にも悪の中にもをられるのだ。

第四のユダヤ人

そんなことを言ふものではない。それは極く危険な説だ。アレキサンドリアの學派から来る説で、あそこではギリシア哲學がはやつてゐるのだ。そしてギリシア人といふ奴は異教徒なのだ。あれらは割禮をさへ受けてゐないのだ。

第五のユダヤ人

神さまがどんなことをなさるかといふことは人間には知ることが出来ぬ。神さまの道は全く神祕だ。あるひは、わたたちが悪と云うてをることが善であるかも知れぬし、わたたちが

善と云うてをることが悪であるかも知れぬ。人間には何も知ることが出来ぬのだ。何事にも服従してゐることが大切なのだ。神さまは非常に強い。弱い者も強い者も一緒に打ち碎かれる。神さまは誰をもお氣にかけられぬ。

第一のユダヤ人

それはほんたうだ。神さまは恐しい。人間が小麥を臼の中で碎くやうに、弱い者も強い者も打ち碎かれるのだ。けれども、あの男は神さまを見たことなど決してない。預言者エリーよりこのかた、誰一人も神さまを見た者はをらんのだ。

エロディアス

あれらを黙らせて下さい。退屈でたまりませぬ。

エロド

しかし、あのヨカナンがそちたちの申す預言者エリーだといふ噂を、わしは聞いてをるが。

一人のユダヤ人

そんなことがある筈はございませぬ。預言者エリーの時から、もう三百年以上もたつてをります。

エロド

でもあれが豫言者エリーだと申す者がゐるぞ。

一人のナザレ人

ほんとに、わたくしはあれが豫言者エリーに違ひないと思つてをります。

一人のユダヤ人

いやいや、あれは豫言者エリーなどではない。

ヨカナンの聲

その日は来た。主の日は来た。そしてわしには山々に世界の救済者となるべき人の足音が聞える。

エロド

あれはどういふ意味だ？ あの世界の救済者とは？

ティジェラン

それはローマ皇帝のお使ひになる御稱號であります。

エロド

しかしローマ皇帝はユダヤへはお出でにならぬ。わしは昨日ローマからの手紙を受取つた。

サ

ロ

メ

ティジェラン

それには誰もそんなことは言つてをらなかつた。とにかく、ティジェラン、御身はこの冬の  
間ローマにをられたが、そのやうな噂は何も聞かれなかつたらうな？

確かに、陛下、さやうな話は聞き及びませんでした。わたくしはただあの稱號のことを御  
説明申し上げただけでございます。あれはローマ皇帝の御稱號の中の一つでございます。

エロド

ローマ皇帝はお出でになる筈がない。皇帝は痛風に悩んでをられるといふことだ。足が象  
の足のやうになつてをられるといふ噂だ。それに、政治上の理由もある。ローマを去る者は  
ローマを失ふ。皇帝はお出でにはなるまい。しかし、何と言つても、ローマ皇帝は君主であ  
らせられる。お出でにならうと思はれればお出でになるだらう。だが、わしは皇帝がお出で  
になるとは思はぬ。

第一のナザレ人

あの豫言者の申しましたのはローマ皇帝のことではございませぬ、陛下。

エロド

ローマ皇帝のことではないと？

第一のナザレ人

さやうでございます、陛下。

エロド

では誰のことを言つたのかな？

第一のナザレ人

來られました救世主のことで。

一人のユダヤ人

救世主は來てはをられぬよ。

第一のナザレ人

來て、到る處でさまざまの奇蹟を行つてをられるのだ。

エロディアス

おやおや！ 奇蹟だと。わたしは奇蹟などといふものは信じないよ。今までにあまりたくさん見たからね。「尊重に」。わたしの扇を。

第一のナザレ人

その人はほんたうの奇蹟を行つてをられるのでございます。例へば、ガリラヤの或る小さ

な町で、相當重要な町でございますが、婚禮がありました時に、その人は水を葡萄酒に變へられました。その場に居合せた人たちがわたくしにその話をしてくれましたのです。それからまた、その人は、カペナウムの門の前に坐つてをりました二人の癩病<sup>や</sup>みを、ただ手で觸つただけで癒<sup>い</sup>されました。

第二のナザレ人

いや、あの人がかペナウムで癒<sup>い</sup>されたのは二人の盲人<sup>めくら</sup>であつたよ。

第一のナザレ人

いや、あれは癩病<sup>や</sup>みだつた。しかし盲人<sup>めくら</sup>も癒<sup>い</sup>されたことがあつたし、あの方が或る山の上で天使たちと話してをられるのを見た者もある。

一人のサドカイ教の者

天使などといふものはゐない。

一人のパリサイ派の者

天使たちはゐるが、しかしその男が天使たちと話してゐたといふことはわたしは信じない。

第一のナザレ人

その方が天使たちと話してをられるのは大勢の通りすがりの者が見たのだ。



一人のサドカイ敬の者

天使と話すなんてことはないさ。

エロディアス

この人たちは何とわたしをうるさがらせるのだらうね！ みんな馬鹿だ。全く馬鹿だ。「侍童に。」さあ、これこれ！ わたしの扇を。「侍童扇を彼女に渡す。」お前は夢をみてゐるやうな様子をしてゐるねえ。夢をみてゐるものではない。夢みてゐる人は病人だよ。「侍童を扇で打つ。」

第二のナザレ人

それからまた、ジャイルの娘の奇蹟もございます。

第一のナザレ人

うん、さうさう、あれは非常に確かなことだ。あれが嘘だとは誰も言へないよ。

エロディアス

あの連中は気が狂つてゐるのです。あれらはあんまり月を見過ぎたのでせう。あれらに黙りなさいと言つて下さい。

エロド

そのジャイルの娘の奇蹟といふのはどんなことなのだ？

第一のナザレ人

ジャイルの娘が死にましたのです。それをあの方が甦よみがへらせたのでございます。

エロド

その男は死人を甦よみがへらすとな？

第一のナザレ人

さやうでございます、陛下。その人は死人を甦よみがへらせます。

エロド

わしはその男にそんなことをして貰ひたくない。わしはその男がそんなことをするのを差止める。わしは誰でも死人を甦よみがへらせることを許さぬぞ。その男を探し出して、死人を甦よみがへらせることはわしが許さぬといふことを申しつけてやらねばいかん。その男は今何處にゐる？

第二のナザレ人

その人は何處にでもをられます、陛下。けれどもあの人を見つけるのはなかなかむづかしいございませう。

第一のナザレ人

唯今はサマリアにをられるといふ噂でございます。

一人のユダヤ人

その男がサマリアにゐるとするなら、救世主でないことはよくわかる。サマリア人のところへは救世主は来られない筈だ。サマリア人は呪はれた者どもだ。奴らは神殿へお供物を持つて来たことがない。

第二のナザレ人

あの人は二三日前にサマリアを發たれました。わたくしは、目下はエルサレムの近傍にをられると思ひます。

第一のナザレ人

いやいや、あそこにはをられぬ。わしはたつた今エルサレムから著いたばかりなのだ。二月前からあの人の話を聞いた者はなかつたよ。

エロド

とにかく、それはどうだつていい！ だが、その男を探し出して、わしの名で、死人を甦らせることは許さぬといふことを申しつけてやらねばいかん。水を葡萄酒に變へたり、癩病病みや盲人を癒したり……そのやうなことなら何でも、したければしてもよい。わしはそれには何も文句は言はぬ。實際、癩病病みを癒すといふことはよい行ひだとわしは思ふ。

だが死人を甦らせるといふことは許さぬ。……もし死人が生き返つてなど来るなら、恐しいことになるだらう。

ヨカナンの聲

ああ！ 淫婦よ！ 娼婦よ！ ああ！ 金の眼と金色の臉をしたバビロンの娘よ！ 主なる神の仰せられることを聞け。數多の人をしてかの女に向つて集らしめよ。人々をして石を取らしめかの女を石にて打ち殺さしめよ。……

エロディアス

あの男を黙らせて下さいまし！

ヨカナンの聲

軍の隊長たちをしてその劍もてかの女を刺し貫かしめよ。彼等をしてその楯の下にかの女を押し潰さしめよ。

エロディアス

ほんに、不埒なことだ。

ヨカナンの聲

かくして、われは地上から罪惡を除き去るであらう。また、すべての女人はその女の忌は

しい所業を見做はぬやうになるであらう。

エロディアス

あなたにはあの男がわたくしの悪口を言つてゐるのが聞えませぬか？ あなたはあの男に御自分の妻を侮辱させておおきなさいますのですか？

エロド

でもあの男はそなたの名前を言ひはしなかつたよ。

エロディアス

それがどういたしましたか？ あの男が侮辱しようとしてゐるのがこのわたくしであるといふことは、あなたはよく御存じです。そしてわたくしはあなたの妻ではございませぬか？

エロド

さうだよ、いとしい立派なエロディアス、そなたはわしの妻だ。して始めはわしの兄貴の妻であつた。

エロディアス

その人の腕かひなからわたくしを引き離したのはあなたでございました。

エロド

まこと、わしはあれよりも強かつたのだ。………だが、そのことについては言はないことにしよう。わしはそのことについては言ひたくない。かの豫言者があの恐しい言葉を言つたのも、そのことのためなのだ。ことによつたら、そのことのために何か禍が起らうとしてゐるのかも知れぬ。あのことは言はないことにしよう。………けだかいエロディアスよ、わしたちは客人方のことを忘れてをつたぞ。さあ、いとしの者よ、わしに酒を注いでくれ。銀の大杯と玻璃の大杯とに酒をなみなみと注いでくれい。わしはローマ皇帝の御健康を祝して杯を擧げるのだ。ここにはローマの人々もをられる。ローマ皇帝の御健康を祝して杯を擧げなければならぬ。

一同

ローマ皇帝萬歳！　ローマ皇帝萬歳！

エロド

そなたはそなたの娘があんなに蒼い顔をしてゐるのに気がつかぬのか？

エロディアス

あれが蒼い顔をしてゐようが、それがあなたにどうしたと仰せられるのです？

エロド

あんなに着い顔をしてゐるのはこれまでに見たことがない。

エロディアス

あればかり御覽なされてはなりません。

ヨカーンの聲

その日には、日は喪服の如くに黒くなり、月は血の如くなり、大空の星はまた熟しな<sup>た</sup>無花果が無花果の樹から落ちるが如くに地上に落ち、地上の王者どもは恐れをのくであらう。

エロディアス

おや、まあ！ わたしは、あの男の言つてゐる、月が血のやうになつたり、星がまだ熟しない無花果のやうに地面に落ちたりするとかいふその日を、見たいものだ。あの豫言者はまるで酔ひどれのやうなことをしゃべつてゐる。……だがわたくしにはあの男の聲が我慢がなりません。わたくしはあの聲が嫌ひです。あの男が黙るやうに言ひつけて下さいまし。

エロフ

それはいけない。わたしにはあの男の言つたことはわからぬが、しかしあれは何かの前兆であるかも知れぬ。



エロフ

エロディアス

わたくしは前兆などといふものを信じませぬ。あの男は酔ひどれのやうなことをしやべつてゐるのです。

エロド

あるひはあの男は神の酒に酔うてゐるのかも知れぬわい！

エロディアス

その神の酒といふのはどんな酒でございますか？　どんな葡萄の木からとれるのでございますか？　どんな酒槽さうじゆの中にあるのでございますか？

エロド 「彼はもはやサロメから目を離さない。」

ティージェラン、そなたがこのほどローマにをられた折、皇帝はそなたにあの事柄についてお話あつたかな、あの………？

ティージェラン

何の事柄についてでございますか、陛下？

エロド

何の事柄についてだと？　ああ、さうさう！　わしは御身に何か尋ねたのであつたな？

わしは何を訊きたかつたのか忘れてしまつた。

エロディアス

あなたはまたわたくしの娘を見つめてお出でなさいませぬ。あればかり御覽なされてはな  
りませぬ。そのことはさつきも申しました。

エロド

そなたはそればかり申してをる。

エロディアス

もう一度申します。

エロド

それからあれらが頻りに申してをつたあの神殿の修理は？ あれは何かしたかな？ 聖  
堂の帳とじりがなくなつたとかいふやうな話ではなかつたかな？

エロディアス

あれをお取りになつたのはあなたです。あなたは口から出任せのことを言つていらつしや  
る。わたくしはここにをりたくありません。中へ入りませう。

エロド

サロメ、わしのために舞踏をしてください。

エロディアス

わたしはあれに舞踏をさせたくはありません。

サロメ

わたくしは舞踏をしたいとはちつとも思ひませぬ、王さま。

エロド

エロディアスの娘、サロメよ、わしのために舞踏をしてくれ。

エロディアス

あれに構はずにおいて下さいまし。

エロド

舞踏をせいとわしがそなたに言ひつけるのだ、サロメ。

サロメ

わたくしは舞踏はいたしません、王さま。

エロディアス 「笑つて」

まあ、あれはあなたの仰せをよくききますこと！

エロフ

あれが舞踏をしようがすまいが、それがわしにどうだといふのだ？ そんなことはわしにはどちらだつていい。わしは今夜は愉快だ。非常に愉快だ。これほど愉快だつたことはこれまで一度もない。

第一の兵卒

王さまは陰気なお顔をしてお出でになる。陰気なお顔をしてをられるではないか？

第二の兵卒

うん、陰気なお顔をしてお出でだ。

エロフ

どうしてわしが愉快でない筈があるものか？ 世界の君主であらせられるローマ皇帝が、あらゆるもの主であらせられるローマ皇帝が、わしを甚だ御寵愛せられる。わしによほど高價な贈物を送つて下されたばかりなのだ。それにまた、わしの敵であるカパドシアの國王をローマに呼び出される約束もして下された。多分ローマであの王を磔にされるであらう。ローマ皇帝はしたいと思はれることは何でもお出来になるのだ。とにかく、あの方は君主であらせられるからな。さういふ譯だから、そなたにもわかるであらうが、わしは愉快である

筈なのだ。わしの愉快さを損ふことの出来るものなぞは何一つとしてないのだ。

ヨカーンの聲

かの男は己が王座に坐してゐるであらう。眞紅と猩々狒の衣を身に纏うてゐるであらう。その手には己が神威冒瀆の罪をなみなみと湛へた黄金の器を持つてゐるであらう。そして主なる神の天使は彼を撃つであらう。彼は蟲に噬まれるであらう。

エロディアス

あの男があなたのことを申してゐるのをお聞きなされましたせう。あなたが蟲にお噬まれになると申してをりますよ。

エロフ

あの男の言つてゐるのはわしのことではない。あの男はわしの悪口は何一つも一度も言つたことがない。あの男の言つてゐるのはカパドシアの國王のことだ。わしの敵であるあのカパドシアの國王のことだ。蟲に噬まれるだらうといふのはあの王のことだ。わしのことではない。あの豫言者は今までにわしの悪口は何一つも言つたことがなかつた。ただ、わしが自分の兄弟の妻を妻にしたのが悪いと言つたことがあるだけだ。恐らくあの男の言ふことに道理があるのであらう。まこと、そなたは石胎女だからな。

エロディアス

わたくしが石胎女いしざいむですつて？ わたくしの娘ばかりいつも見つめてお出でになるあなたが、御自分の楽しみのためにあれに舞踏をさせたがつてお出でになつたあなたが、そのあなたがよくもそんなことを仰しやれますね。そんなことを仰しやるのは阿呆らしいことでございます。わたくしは子供を一人生ましました。あなたこそ子供が一人もなかつたのです。あなたの奴隷女たちの中の一人にさへ子供が出来なかつたのです。子供の出来ぬのはあなたで、わたくしではありませぬ。

エロメ

黙りなさい。そなたが石胎女だと申すのだ。そなたはわしの子供を生まなかつた。それでのかの豫言者はわしたちの結婚は正しい結婚ではないと言ふのだ。近親相姦の結婚だ、禍を惹き起す結婚だと言ふのだ。……わしはあの男の言ふことがほんたうなではなからうかと気がかりだ。きつとほんたうなのであらうと思ふ。だが、今はそんな事を言つてゐる時ではない。この今はわしは愉快でゐたいのだ。まことのところは、わしは愉快なのだ。非常に愉快なのだ。不足なものとは何一つない。

エロディアス

あなたが今夜それほど御機嫌がおよろしいのは、わたくしも大層嬉しいことでございます。いつもにないことでございますから。しかしもう時刻も晩まうございます。中へ入りませう。明日日の出にはみんな狩に参りますことをお忘れなさいませぬやうに。ローマ皇帝のお使者たちには出来るだけの御もてなしをしなければならぬではございませぬか？

第二の兵卒

王さまは何と陰気なお顔をしてお出でだらう。

第一の兵卒

さうだ、陰気なお顔をしてお出でになるなあ。

エロメ

サロメ、サロメ、わしのために舞踏をしておくれ。そなたに頼むからわしに舞踏を見せてくれ。今夜はわしは氣が沈む。さうだ、わしは今夜は非常に氣が沈んでゐる。わしはここへ出て来た時、血に滑つたが、あれは悪い前兆だ。それに、わしには空中に羽ばたきの音が、途方もなく大きな翼の羽ばたきの音が聞えた。確かに聞えたと思ふ。あれはどういふことなのかわしにはわからぬ。……わしは今夜は氣が沈んでゐる。だからわしに舞踏をして見せてくれ。わしのために舞踏をしてくれ、サロメ、わしはそなたに頼む。もしそなたがわし



のために舞踏をしてくれるなら、そなたは何であらうとほしいものをわしに願うてもよい。さうすればわしはそれをそなたにやらう。さうだ、わしのために舞踏をしてくれい、サロメよ。さうすれば、そなたの願ふものを何であらうと、たとひそれがわしの領國の半分であらうと、そなたにやらう。

サロメ 「立ち上つて」

あなたは何であらうと願ひいたしますものは何であらうと下さいますか、王さま？

エロディアス

舞踏をするではありませんよ、娘。

エロド

何であらうと、たとひそれがわしの領國の半分であらうと。

サロメ

あなたはそれをお誓ひになりますね、王さま？

エロド

わしは誓ふ、サロメ。

エロディアス

娘や、舞踏をするではありませんぬ。

サロメ

何にかけてお誓ひになりますか、王さま？

エロド

わしの命いのちにかけて、わしの冠にかけて、わしの神々にかけてだ。もしそなたがわしのために舞踏をしてくれるなら、そなたの願ふものは何であらうと、たとひわしの領國の半分であらうと、そなたにやらう。おお！ サロメ、サロメ、わしのために舞踏をしてくれい。

サロメ

あなたはお誓ひになりました、王さま。

エロド

わしは誓うたよ、サロメ。

サロメ

わたくしのお願ひいたしますものは何であらうと、たとひあなたの御領國の半分であらうと？

エロディアス

舞踏をするのではありませぬ、娘。

エロド

たとひわしの領國の半分であらうとだ。もしお前がわしの領國の半分をほしいと言ふなら、サロメ、お前は女王としてどんなに美しくなるだらう。あれは女王としてどんなにか美しいではないか？ ……ああ！ ……ここは寒いぞ！ 大變寒い風がある。それにあの音が………  
 ……どうしてわしには空中にあの羽ばたきの音が聞えるのか？ おお！ 何かの鳥が、何か大きな黒い鳥が、この臺地の上を飛び舞うてでもゐるやうだ。どうしてわしにはその鳥が見られないのだらう？ あの鳥の羽ばたきは恐しい。あの翼から起つて來る風は恐しい。どうも寒い風だ。……いやいや、ちつとも寒くはない。それどころか、大層暑い。これは暑過ぎる。わしは息が詰る。わしの手を水をかけてくれ。食べるのだから雪をくれい。この袍衣を緩くしてくれ。速く、速く、わしの袍衣を緩くしてくれい。……いや。このままにしておけ。苦しいのはこの冠だ。わしの薔薇の冠だ。この花はまるで火のやうだ。額に焼けつく。「頭から冠を引き離し、それを卓子の上に投げ出す。」ああ！ やうやく息がつける。あの花は何と赤いのだ！ 食卓掛に血の汚染がついてでもゐるやうだな。そんなことは何でもない。見る物一つ一つに意味を見つけようなどとしてはならぬ。そんなことをしてゐては生き

メ ロ サ

てみられなくなる。血の汚染は薔薇の花瓣と同じくらゐに美しいと言ふ方がよからう。さう言ふ方がよつぽどよからうて。……しかしこんなことを言はずにおかう。今はわしは愉快だ。非常に愉快だ。わしは愉快であつていい筈ではないか？ そなたの娘がわしのために舞踏をしようとしてゐるのだよ。サロメ、そなたはわしに舞踏をして見せてくれようとしてゐるのだな？ そなたはわしのために舞踏をしてくれる約束をしたのだ。

エロディアス

わたくしはあれに舞踏をさせたくありません。

サロメ

わたくしはあなたのために舞踏をいたませう、王さま。

メ

エロド

そなたの娘の申すことを聞いたであらう。あれはわしのために舞踏をしようとしてゐるのだ。わしのために舞踏をしてくれるのは、サロメよ、至極尤もなことだよ。そして、舞踏をしてしまつたら、そなたのほしいものを何でも皆わしに願ふことを忘れるなよ。そなたのほしいものは何でも皆やらう。それがわしの領國の半分であらうとだ。わしは誓つたではないか？

サロメ

あなたはお誓ひになりました、王さま。

エロフ

してわしは自分の約束を破つたことは一度もない。わしは自分の約束を破るやうな人間ではない。わしは嘘をつくといふことを知らぬ。わしは自分の言葉の奴隷であり、わしの言葉は王者の言葉だ。カパドシアの國王はいつも嘘ばかりついてゐる。だがあれはまことの王ではないのだ。あれは卑劣漢だ。それに、あの男はわしに金を借りてゐるが、それを返さうとも思つてをらぬ。わしの使者を侮辱さへしをつた。非常に氣に觸るやうなことを言ひをつた。だが、奴がローマへ著けばローマ皇帝が奴を磔にされるであらう。わしはローマ皇帝がきつと奴を磔にされるであらうと思ふ。さうでないとしても、奴は蟲に噬まれて死ぬであらう。あの豫言者がさう豫言してをるのだ。ところで、さあ！ サロメ、そなたは何を待つてをるのかな？

メ ロ サ

サロメ

わたくしの奴隷たちが、香料と七つの面紗かづきとを持つて来て、わたくしの靴★を脱がせてくれるのを、待つてゐるのでございます。



Something  
one part is  
strange!

「女奴隷たち香料と七つの面紗フェイスマスクとを持って来て、サロメの括り靴サンダルを脱がす。」

ヒロフ

ああ！ そなたは素足で舞踏をするのだな！ それは素敵だ！ それは素敵だ！ そなたの小さな足は白い鳩のやうであらう。それは木の上で舞踏をしてゐる小さな白い花にも似てゐるであらう。……ああ！ いけない、いけない。あれは血の上で舞踏をしようとしてゐるぞ！ 地面には血が流れてゐるのだ。わしはあれに血の上で舞踏をして貰ひたくない。それは非常に悪い前兆だ。

ヒロディアス

あれが血の上で舞踏をしたところで、それがあなたにどうしたと仰しやるのです？ あなたはその血の上を十分にお歩きになりましたよ、あなたは……。

ヒロフ

それがわしにどうしたと言ふのだ？ ああ！ あの月を見い！ あれは赤くなつた。血のやうに赤くなつた。ああ！ あの豫言者の豫言した通りだ。あの男は月が血のやうに赤くなると豫言した。さう豫言したではないか？ そちたちはみんなそれを聞いた筈だ。月は血のやうに赤くなつてゐる。そちどもにはあれが見えぬか？

## エロディアス

ええ、ええ、わたくしにはよく見えますとも。それから、星がまだ熟しない無花果のやうに落ちますね。さうではございませぬか？ それから、日は喪服のやうに黒くなり、地上の王者たちは恐れをのいてをります。少くともそれだけは、誰にでもわかりますよ。あの豫言者も生涯に一度だけはほんたうのことを言ひました。地上の王者たちは恐れをのいてをりますから。………何にしても、中へ入りませう。あなたは御病氣なのです。やがてローマではあなたは氣が狂つてをられると申されるやうになりませう。さあさあ、中へ入りませうよ。

## ヨカナーンの聲

エドムから來る者は誰だ？ 深紅に染められた衣を着てボズラから來る者は誰だ？ その者は美しい衣裳を著飾り、力強い歩みもて進んで來る。何故に御身の衣裳は猩々緋にじいろに染めてあるのか？

## エロディアス

入りませう。あの男の聲を聞くとわたくしは腹が立つてなりませぬ。あの男があつたやうに喚おどいてゐる間は、わたくしは娘に舞踏をさせたくありません。あなたがそのやうにあれを見



つめてお出でになる間は、わたくしはあれに舞踏をさせたくありません。何にしても、わたくしはあれに舞踏をさせたくはありません。

ヒロフ

座を立つな、妃よ、それは無益だ。あれが舞踏をしないうちにはわしは中へは入らぬぞ。舞踏をしてくれ、サロメよ、わしのために舞踏をしてくれい。

サ

エロディアス

舞踏をするではありませんよ、娘。

ロ

サロメ

わたくしは支度が出来ました、王さま。

メ

〔サロメ七つの面纱セブン・フェイスの舞踏をする。〕

ヒロフ

ああ！ 見事だ、見事だ！ 見い、そなたの娘はわしのために舞踏をしてくれたぞ。近う参れよ、サロメ。わしがそなたにそなたの褒美をやるやうに、近う参れ。ああ！ わしは舞姫たちには十分に報酬を取らせるのだ、わしはな。お前にも、十分に報酬を取らせよう。お前のほしいものは何なりともやらう。何がほしいか？ 言うてくれい。

サロメ 「跪いて」

わたくしの今直ぐに持つて来させて頂きたいものは、銀の大皿の中に入れました………

エロド 「笑つて」

銀の大皿の中にな？ うむ、よしよし、きつと、銀の大皿の中にだ。あれは可愛いことを申すではないか？ そなたが銀の大皿の中に入れて持つて来させてほしいといふものは何だ、わしのいとしい美しいサロメ、ユダヤ中の娘たちの中で一番美しいサロメよ？ そなたが銀の大皿の中に入れて持つて来させてほしいといふものは何だ？ 言つてくれ。たとひそれが何であらうともそなたに取らせよう。わしの寶はそなたのものだ。それは何だな、サロメ？

サロメ 「立ち上つて」

ヨカナーンの首でございます。

エロディアス

ああ！ よく言つた、娘や。

エロド

いや、いや。



アタラシ

エロディアス

よく言つた、娘。

エロド

いや、いや、サロメ。そなたはそんなものをわしに願ふのではあるまい。そなたの母の言ふことを聴くのではない。あれはいつもそなたに悪い事ばかり勸めてをる。あれの言ふことなどを聴くのではない。

サ

サロメ

わたくしはお母さまの仰しやることを聴いてゐるのではありませぬ。銀の大皿の中にヨカナインの首を入れて下さいとお願ひいたしますのは、わたくし自身の氣持でございます。あなたはお誓ひになりました、エロドさま。あなたが お誓ひになりましたことをお忘れ遊ばしません。

メ

エロド

それは知つてゐる。わしはわしの神々にかけて誓つた。しかし、わしはそなたに頼む、サロメよ、他のものを望んでくれ。わしの領國の半分をほしいと言つてくれ。さうすればそれをやらう。だがそなたの今言つたものは願つてくれるな。



サロメ

わたくしはヨカナーンの首が頂きたいのでございます。

エロド

いや、いや、それはやりたうない。

サロメ

あなたはお誓ひになりました、エロドさま。

エロディアス

さうです、あなたはお誓ひになりました。皆の者がそれを聞いてをります。あなたは皆の前でお誓ひになりました。

エロド

黙りなさい。わしはそなたに話をしてゐるのではない。

エロディアス

娘がああ男の首を望むのは至極尤もなことでございます。あの男はわたくしに向つて無禮な言葉を吐いたのです。わたくしに向つてひどいことを申したのです。あれが母を大切に思うてをることは誰にもよくわかりませう。譲るのではありませぬぞ、娘や。王さまはお誓ひ

になつたのだよ、お誓ひになつたのだよ。

エロド

黙りなさい。わしにしやべるな。………いいか、サロメ、ものの道理を辨へなくてはならぬぞ。さうではないか？ 道理を辨へなくてはならぬではないか？ わしはこれまでそなたにつらくしたことなどは一度もなかつた。わしはいつもそなたを可愛がつて来た。………あるひは、可愛がり過ぎたかも知れぬ。だから、わしにそんなものを望んでくれるな。そんなものをくれと言ふのは氣味の悪いことだ、恐いことだ。ほんたうに、わしにはそなたが本氣で言うてをるのだとは信じられぬ。胴から斬り離れた男の首などといふものは、見苦しいものではないか？ それは處女じよの見るべきものではない。そんなものを見て何が面白いものか？ 何も面白くはない。いや、いや、そなたはそんなものをほしいのではあるまい。………まあ暫くわしの言ふことを聽いてくれ。わしは緑柱玉キョウジュウタマを持つてゐる。ローマ皇帝の寵臣がわしに送つてくれた圓い大きな緑柱玉だ。この緑柱玉を透して見ると、ずつと遠くで起つてゐる事まで見ることが出来るのだ。ローマ皇帝御自身も、競技場へお出でになる時には、これと同じものを持つて行かれる。しかしわしのはそれよりも大きいのだ。わしのがそれよりも大きいといふことをわしはよく知つてゐる。あれは世界中でも一番大きい緑柱

メ ロ サ

玉だ。そなたはそれがほしくはないか？ それをくれと言うてくれ。さうすればそれをそなたにやらう。

サロメ

わたくしはヨカナーンの首を頂きたうございます。

エロド

そなたはわしの言ふことを聴いてはゐない。わしの言ふことを聴いてはゐないのだ。とにかく、わしにしやべらせてくれ、サロメ。

サロメ

ヨカナーンの首を。

エロド

いや、いや、そなたはそんなものがほしいのではない。そなたは、わしが今宵中ずつとそなたを見つめてゐたので、ただわしを困らせるためにそんなことを言ふのだ。うむ！ きつとさうだ。わしは今宵中ずつとそなたを見つめてをつた。そなたの美しさがわしの心を迷はせたのだ。そなたの美しさがひどくわしを迷はせたので、わしはそなたをあまり見つめ過ぎたのだ。しかしこれからはわしはもうそんなことをしまい。物でも人でも見つめるといふこ

とはよくない。見つめてもよいものは鏡ばかりだ。鏡に見えるものは本物ではないからな。……………おお！ おお！ 酒を！ 咽が渴く。……………サロメ、サロメ、仲よくしような。とにかく、考へてみてくれ……………。わしは何を言ふつもりであつたかな？ 何であつたかな？ ああ！ 思ひ出したぞ！ ……………サロメ！ いや、もつとわしの近くへ来てくれい。そなたにわしの言ふことが聞えないのではないかとわしは気がかりだ。……………サロメ、そなたはわしの白孔雀を知つてゐるな。園の桃金娘てんごんじょうと高い絲杉との間を歩いてゐる、わしの美しい白孔雀を知つてゐるな。嘴には金を塗つてあるし、餌にしてゐる穀粒にもやはり金を塗つてあり、足は眞紅の色に染めてある。あの孔雀どもが啼けば雨になるし、羽を擴げれば月が空に出る。二羽づつ並んで絲杉と黒い桃金娘との間を歩き、その一羽づつに世話をする奴隷が一人づつ附いてゐる。時々樹立を越えて飛ぶこともあるし、また時には芝の上や池の周りに蹲つてゐることもある。世界中にもあれほどに素晴らしい鳥はゐない。あれくらゐ素晴らしい鳥を持つてゐる國王は世界に一人もをらぬ。きつとローマ皇帝でもあれくらゐ美しい鳥は持つてお出でではあるまいとわしは思ふ。ところで、いいかな！ その孔雀を五十羽そなたにやらう。それは何處でもそなたの行くところへついてゆくであらう。そして、その真中にゐると、そなたはさぞ大きな白い雲の中の月のやうであらうな。……………わしはそなた

にその孔雀をみんなやらう。わしは百羽持つてゐるだけなのだ。そしてわしの孔雀のやうな孔雀を持つてゐる國王は世界に一人もをらぬが、しかしそれをみんなそなたにやらう。ただ、わしの約束を解いてくれて、そなたのさつき言つたものは願はずにおいてください。「杯の酒を飲み干す」

サロメ

わたくしにヨカナーンの首を下さいまし。

エロディアス

よく言つた、娘！ あなた、あなたの孔雀の話は馬鹿げてをりますよ。

エロド

黙りなさい。そなたは喚こゑいてばかりゐる。そなたの喚こゑき聲は猛獸のやうだ。そんな風に喚こゑいてはならん。そなたの聲を聞くと氣持が悪くなる。黙りなさいと言ふのだ。………サロメ、そなたのしてゐることを考へてみてくれい。あの男は恐らく神の許もとから來てゐる者だ。きつと神の許もとから來た者だとわしは思ふ。あれは聖者だ。神の指があつた男に觸れてゐるのだ。神があつた男の口にあの恐しい言葉を言はせてをられるのだ。宮殿の中でも、沙漠の中と同じく、神はいつもあの男と共にをられるのだ。………少くとも、さういふことはあるかも知

サ

れぬ。人にはわからぬが、しかし、神があつた男を助けてをられるしあの男と共にをられるといふことはあるかも知れぬのだ。それに、恐らく、もしあの男が死ぬとなると、わしの身に何か禍が起るであらう。とにかく、あの男は、自分の死ぬ日には誰かに禍が起るだらうと言つてゐる。その誰かといふのはわしでなくて誰であらう。そなたも覺えてをるであらうが、わしはここへ出て來た時に血に滑つた。それにまた、空中に羽ばたきの音が、途方もなく大きな翼の羽ばたきの音が聞えた。これはみな非常に悪い前兆だ。それから他にもまだ前兆があつた。わしの眼には見えなかつたにしても、きつと他にもまだあつたに違ひないとわしは思ふ。ところでだ！ サロメ、そなたはわしの身に何かの禍が起ることを望みはすまい？ そなたはそんなことを望みはせぬだらう。とにかく、わしの言ふことを聽いてくれい。

メ

サロメ

ヨカナーンの首を下さいまし。

エロド

それ、そなたはわしの言ふことを聽いてはをらぬのだ。まあ、落著いてくれ。わしは、極く落著いてゐる。この上なく落著いてゐる。聽きなさい。わしはここにそなたの母にもまだ一度も見せたことのない寶石をいろいろ隠して持つてゐる。全く珍しい寶石をな。わしは四

列になつた眞珠の頸飾りを持つてゐる。それは銀の光線を放つてゐる繫いだたくさんの月のやうだ。金の網にかけた五十ばかりの月のやうだ。或る女王がそれを象牙のやうな胸にかけてゐたのだよ。お前がそれをかければ、お前も女王のやうに美しくなるであらう。わしは二通りの紫水晶を持つてゐる。一つは生葡萄酒のやうに黒い。もう一つは水を割つた葡萄酒のやうに赤い。わしは虎の眼のやうに黄ろい黄玉と、鳩の眼のやうに薔薇色をした黄玉と、猫の眼のやうに緑色をした黄玉とを持つてゐる。わしは非常に冷い焰を放つて絶えず燃えてゐる蛋白石を、人の心を悲しくさせ、暗闇を恐れる蛋白石を持つてゐる。死んだ女の瞳に似た縞瑪瑙を持つてゐる。月が變れば色が變り、日にあたれば蒼白くなる月長石を持つてゐる。鶏の卵のやうに大きい、青い花のやうに青い青玉を持つてゐる。海がその青玉の中に湛へてゐて、月も決してその青い波を亂しには來ないのだよ。わしは貴橄欖石と綠玉石とを持つてゐるし、綠玉髓と紅玉も持つてゐるし、紅縞瑪瑙と風信子石も持つてゐるし、玉髓も持つてゐるが、それをみんなそなたにやらう。それをみんなに、他の品々も添へてやらう。インドの王が、たつた今、鸚鵡の羽で拵へた扇を四本送つてくれたし、ヌミディアの王は駝鳥の羽で作つた衣裳を一枚送つてくれた。わしは水晶を一つ持つてゐるが、その水晶は女には見ることを許されぬし、若い男でさへ答をあてられてからでなければそれを見てはならぬものな

のだ。螺鈿の宝箱の中にわしは珍しいトルコ玉を三つ持つてゐる。それを額にあてれば世の中のない物事を想像することが出来るし、それを手に持てば女を石胎女にすることが出来る。それは非常な價の寶だ。價のはかり知れぬ寶だ。それに、それだけではない。黒檀の宝箱の中にわしは金の林檎に似てゐる琥珀の杯を二つ持つてゐる。もし敵意を持つてゐる者がその杯の中に毒を注げば、その杯は銀の林檎のやうになるのだ。琥珀を鑲めた宝箱の中にわしは玻璃を鑲めた靴を持つてゐる。わしはセレス人の國から來た袍衣と、ユーフラテスの町から來た紅寶玉と硬玉とで飾つた腕環とを持つてゐる。……さて、お前は何がほしいか、サロメよ？ お前の所望のものを言うてくれい。さうすればわしはそれをお前にやらう。ただ一つのものだけは別にして、お前のほしいと言ふものは何でもみんなやらう。ただ一人の人間の命だけは別にして、わしの持つてゐるものをみんなやらう。大司祭の袍衣でもお前にやらう。聖堂の帳でもお前にやらう。

ユダヤ人たち

おお！ おお！

サロメ

ヨカナーンの首を下さい。

エロド 「椅子にぐたりと倒れて」

あれのほしいと言ふものをあれにやれ！ なるほどあの母の娘だ！ 「第一の兵卒進み寄る。エロディアスが王の手から死の指環を抜き取り、兵卒に渡すと、兵卒は直ちにそれを斬首刑吏のところへ持つてゆく。斬首刑吏は恐れ驚く様子をする。」 誰がわしの指環を抜き取つたのだ？ わしは右の手に指環を嵌めてをつたのだ。誰がわしの酒を飲んだのだ？ わしの杯には酒が入つてゐた筈だ。これには酒が一杯入つてゐた筈だ。誰かが飲んだのだな！ おお！ きつとやがて誰かに何か禍が起るだらうとわしは思ふ。 「斬首刑吏用水溜の中へ降りてゆく。」 ああ！ なぜわしは約束なぞをしたのであらう？ 王者は決して約束をしてはならぬ。もしそれを守らないなら、恐しいことだ。守つても、やはり恐しいことだ。……………

エロディアス

わたくしは娘はよくいたしたと思ひます。

エロド

わしはきつとやがて何か禍が起るだらうと思ふ。

サロメ 「用水溜の上に身を屈めて、耳を傾ける。」

音がしない。わたしにはなんにも聞えはしない。どうして聲を立てないのだらう、あの男

メ ロ サ

は？ ああ！ もし誰かがわたしを殺さうとするなら、わたしは大聲を立ててやる。じたばたしてやる。ぢつとしてなんか……………。斬れ、斬れ、ナーマン。斬れと言ふのだよ。……………。いいや。わたしにはなんにも聞えない。恐しいまでにひつそりしてゐる。ああ！ 何か地面に落ちた。何か落ちた音が聞えた。あれは首斬人の剣だ。あの男は怖がつてゐるのだよ、あの奴隷めは！ あの男は剣を落したままにしてゐるらしい。あの男はあれを殺せないのだ。臆病者だ、あの奴隷めは！ 兵卒どもをやらねばならない。 「エロディアスの侍童を見て、彼に話しかける。」 ここへお出で。お前はさつき死んだ男の友達だつたね？ よしよし、まだ人が死に足りないのだよ。兵卒どもに、降りて行つて、わたしのほしいと言つてゐるものを、王さまがわたしに約束なすつたものを、わたしのものになつてゐるものを、持つて来いと言つておくれ。 「侍童後しざりする。サロメ兵卒らに話しかける。」 ここへお出で、兵卒ども。この用水溜の中へ降りて行つて、あの男の首を持つて来ておくれ。 「兵卒ら後しざりする。」 王さま、王さま、あなたの兵卒どもにヨカナンの首をわたくしのところへ持つて参るやうに言ひつけて下さいまし。 「大きな黒い片腕が、斬首刑吏の腕が、銀の楯にヨカナンの首を載せて、用水溜の中から出る。サロメの首を捕む。エロド袍衣で顔を隠す。エロディアス微笑み、扇で扇ぐ。ナザレ人跪き、祈り始める。」 ああ！ お前はわたしにこの口に接吻させてくれようとはしなかつたね、ヨカナンや。さあ！ 今

わたしは接吻するよ。熟した果物を噛むやうに、わたしの歯で噛んでやりませう。さうだ、わたしはお前の口に接吻するよ。わたしはお前にさつきさう言つたではないか？ わたしはさう言つたのだ。さあ！ わたしは今接吻するよ。……だが、どうしてお前はわたしを見ないのだえ、ヨカナン？ あんなに恐ろしかったお前の眼は、あんなに憤怒と輕蔑とを一杯に含んでゐたお前の眼は、今は瞑つてゐるねえ、どうして瞑つてゐるのだえ？ 眼を開けて御覽！ 臉を上げて御覽よ、ヨカナンや。どうしてお前はわたしを見ないの？ わたしを見ようとしなないのは、ヨカナン、お前はわたしが怖いのかえ？ ……それから、毒を吐き出す赤い蛇のやうであつたお前の舌、あれはもう動かなくなつたのね。あれは今は何も言はないのだね、ヨカナン。わたしに向つて毒を吐いたあの赤い蝮蛇がね。不思議ではないか？ あの赤い蝮蛇がもう動かなくなつたのはどうしてだらうね？ ……お前はわたしを相手にしようとしなかつたね、ヨカナン。お前はわたしをはねつけた。わたしにひどいことを言つた。お前はわたしを賣女のやうに、娼婦のやうにあしらつたね、わたしを、エロディアスの娘、ユダヤの王女、サロメを！ ところが、ヨカナンや、わたしはまだ生きてゐるが、お前は死んでしまつて、お前の首はわたしのものになつてゐる。わたしはこの首を自分の思ふやうにすることが出来るのだよ。犬に投げてやることも出来れば、空を飛ぶ



夕三十一の朝西川

鳥に投げてやることも出来る。犬が喰べ残したら、空飛ぶ鳥が喰べませう。……ああ！  
ヨカナン、ヨカナン、お前はわたしの愛したただ一人の男だつた。他の男はみんなわた  
しには厭な氣を起させる。けれども、お前は、美しかつた。お前の體は銀の臺石の上に立つ  
てゐる象牙の圓柱だつた。鳩と銀の百合とで一杯になつてゐる園だつた。象牙の楯で飾つた  
銀の塔だつた。この世の中にはお前の體ほどに白いものは何一つもなかつた。この世の中  
はお前の髪の毛ほどに黒いものは何一つもなかつた。この世界中にはお前の口ほどに赤いも  
のは何一つもなかつた。お前の聲は不思議な香を放つてゐる香爐であつたし、お前を見つめ  
てゐるとわたしには不思議な音楽が聞えて來たのだつた！ ああ！ なぜお前はわたしを見  
つけてくれなかつたのだえ、ヨカナン？ お前は自分の手と自分の悪口の後に自分の顔を  
隠してゐたね。お前は、自分の神を見たいと思つてゐる者の眼隠しの布で、お前の眼を蔽つ  
てゐたね。いかにも、お前はお前の神を見たであらう、ヨカナンや。けれども、わたしを、  
わたしを………お前はわたしを決して見なかつたのだ。もしわたしを見たなら、お前はわ  
たしを愛してくれたらうに。わたしはお前を見て、ヨカナン、そしてお前を愛したのだ。  
おお！ どんなにわたしはお前を愛したらう！ わたしは今でもお前を愛してゐるのだよ、  
ヨカナン。わたしはお前だけしか愛してゐない。………わたしはお前の美しさに渴いて

ある。わたしはお前の體に飢ゑてゐる。そして酒も果物もこの飢ゑ渴きを止めることが出来ないのだ。わたしは今どうしたらいいだらう、ヨカナン？ 河の水でも海の水でもわたしの胸の火を消すことが出来ない。わたしは王女だった。それをお前はさげすんだ。わたしは處女だった。それをお前は處女でなくしてしまつた。わたしは清淨無垢だった。それをお前はわたしの血を燃え立たせたのだ。……ああ！ ああ！ どうしてお前はわたしを見てくれなかつたのだえ、ヨカナンや？ わたしを見てくれたならお前はわたしを愛したらうに。お前がわたしを愛したらうといふことをわたしはよく知つてゐる。そして愛の神祕は死の神祕よりも大きなものなのだ。愛より他のものは考へなくてもよいのだよ。

エロフ

あれは化物だ、お前の娘は。あれは全く化物だ。とにかく、あれのしてゐることは大きな罪悪だ。きつと、人に知られてゐない或る神に對する罪悪だらうとわしは思ふ。

エロディアス

わたくしは娘のしましたことはよいことだと思ひます。わたくしは今ではここにをりたうございます。

エロフ 「立ち上つて」



長崎朝



ああ！ そんなことを言ふ近親相姦の妃よ！ 来い！ わしはここにをりたうない。来いと申すのだ。きつとやがて何か禍が起るだらうとわしは思ふ。マナッセ、イサカル、オジラス、松明を消せい。わしはこんな事どもを見たうない。こんな事どもに見られたうない。松明を消せい。月を隠せ！ 星を隠せ！ エロディアス、わしどもは宮殿の中へ隠れよう。わしは恐しくなつて来たぞ。

〔奴隸たち松明を消す。星が見えなくなる。大きな黒い一團の雲が月にかかつて、月をすっかり隠す。舞臺全く暗くなる。王は階段を上り始める。〕

ロ

サロメの聲

ああ！ わたしはお前の口に接吻したよ、ヨカナン、わたしはお前の口に接吻したよ。お前の唇には苦い味があつた。あれは血の味だつたらうか？ ……いや、ことによつたらあれは戀の味かも知れない。戀は苦い味がするといふことだから。……だが、そんなことはどうでもいい。どうでもいい。わたしはお前の口に接吻したのだよ、ヨカナン、わたしはお前の口に接吻したのだよ。

〔一條の月光サロメに射してその姿を照す。〕

117

エロド

〔振り返つてサロメを見て〕

あの女を殺せい!

「兵卒ら突き進んで、エロディアスの娘、ユダヤの王女、サロメを楯の下に押し殺す。」

メ ロ サ



## 註

★ 人物。——ユダヤの分封の王エロドは聖書に出てゐるヘロデ。豫言者ヨカナンはキリストの先驅者であつたバプテスマのヨハネのこと。ローマ人ティジェランはラテン語讀みではティゲルリヌス。エロドの妃エロディアスは聖書のヘロデヤである。

★ 舞臺。——この舞臺装置の指示は演出者を當惑させるといふ。舞臺の廣間は臺地の下の方にあるらしく、右手の巨大な階段は臺地から上るものである。上演に際してはこの原作者の指示は屢々閑却されることがある。

★ 用水溜。——この用水溜は地下にあつて、流れ込む雨水を溜めておくに用ひられたものである。もとは井戸であつたのを、用水溜とし、現在は更にそれを牢獄に用ひてゐるのであらう。豫言者ヨカナンがその中に入れられてゐる。エリー。——聖書のエリヤ。

★ バビロンの娘。——淫蕩な女といふ意味である。バビロンは古代バビロニア王國の首府。繁榮の極風俗頗る奢侈淫靡となり、悪事淫行が盛んに行はれたので、「バビロン」は淫蕩な都市の代名詞となつたのである。

★ ソドムの娘。——邪惡な女の意味である。ソドムは死海の附近にあつたパレスティナの都府。住民の邪惡のため天からの硫黄と火とで滅されたと舊約全書創世記に記されてゐる。

★ 頭に灰をふりかける。——昔のユダヤ人の悔罪の時の習慣である。

★ サロメは何處にゐる？ …… ああ！ あすこにゐるな！ — サロメは、ヨカナンが用水溜の中へ降りてからは、その用水溜の傍に行つて覗き込むやうにしてゐるのである。彼女はこれから後ずつとそこに横つたままにしてゐる。

★ 一人のサドカイ教の者。 — ユダヤ人の中の一人である。

★ 一人のパリサイ派の者。 — 同じくユダヤ人の中の一人である。

★ ジャイル。 — 聖書に書かれてゐるユダヤ會堂の宰<sup>ツツキ</sup>サイロのこと。(その娘が死んだのをキリストが甦<sup>ツツキ</sup>らせた奇蹟は、マコ傳第五章、ルカ傳第八章、マタイ傳第九章などに詳しく記されてゐる。前の奇蹟もいづれも福音書に出てゐる。)

註

★ あの連中は氣が狂つてゐるのです。あれらはいんまり月を見過ぎたのでせう。 — 昔、ロー

マ人などには人間の氣が違ふのは月の變化影響によるものと信ぜられてゐたのである。(今日のフランス語や英語の「狂人」といふ語「lunatic」、「lunatic」はラテン語の「月」といふ語「luna」から出てゐる。)

★ 靴。 — サンドルのこと。古ギリシア人、ローマ人、その他古代の諸國民に用ひられた、革紐で足の甲の上と踵の周りを巻いて足に括りつける一種の靴である。

● 地名について。 — ユダヤ、ナザレ、シリア(スリア)、カバドシア(カバドキア)、パレスティナ(パレスティン)、カルデア、アッシリア、アッスリヤ、ティロス(ツロ)、エドム、レバノン、モアブ、ガリラヤ、カペナウ

ム、サマリア、ボズラ、等々はすべて聖書の地圖に記されてゐる。ヌミディアはアフリカ北部にあつた古代の王国。セレスは古ギリシア人、ローマ人などが絹布の産地として中央アジアあるひは支那北部地方をさして言つた名である。尚、ボズラはエドムの國にある町であり、エドムはエロドの生れた土地であるといふ。

註

● ピアヅリーの畫について。 — ピアヅリーの各畫面には三本の蠟燭と三つの花籃のやうなものが描いてある。これはピアヅリーの落款に當るものである。

岩波文庫  
1272

昭和十一年二月二十四日印  
昭和十一年二月二十九日發

發行所

東京市神田區  
一ツ橋二丁目三番地

岩波書店

電話一〇一八八七・〇〇一八八八番  
九段一〇二二番(小賣部専用)  
振替口座東京二六二四〇番

1.2.24

印刷行

サロメ  
定價二十錢

(覆本製本)

譯者

佐々木直次郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩波茂雄

印刷者

東京市神田區錦町三丁目十一番地  
白井赫太郎

精興社印刷

讀書子に寄す

岩波文庫發刊に際して

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を小數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開き立たしめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に互つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外観を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は毅力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

既刊書目

國文學

- 古事記 幸田成友校訂★
- 日本書紀 上卷 黒坂勝美編★
- 日本書紀 中卷 黒坂勝美編★★
- 日本書紀 下卷 黒坂勝美編★★★
- 記紀歌謠集 武田祐吉校註★
- 新萬葉集 上卷 佐佐木信綱編★★★
- 新萬葉集 下卷 佐佐木信綱編★★★
- 白萬葉集 上卷 佐佐木信綱編★★★
- 白萬葉集 下卷 佐佐木信綱編★★★
- 祝詞・壽詞 千田 豊編★
- 古語拾遺 加藤玄智校訂★
- 竹取物語並附録 島津久基校訂★
- 伊勢物語 尾代弘賢校訂★
- 古今和歌集 尾上入郎校訂★★

- 土佐日記 池田龜徳校訂★
- 神樂歌・催馬樂 武田祐吉編★★
- 倭漢朗詠集 山田孝雄校訂★
- 枕草子(春曙抄) 上 池田龜徳校訂★★
- 枕草子(春曙抄) 中 池田龜徳校訂★★
- 枕草子(春曙抄) 下 池田龜徳校訂★★
- 源氏物語(一) 島津久基校訂★★
- 源氏物語(二) 島津久基校訂★★
- 源氏物語(三) 島津久基校訂★★
- 源氏物語(四) 島津久基校訂★★
- 源氏物語(五) 島津久基校訂★★
- 紫式部日記 池田龜徳校訂★
- 更級日記 西下經一校訂★
- 三條西公正校訂★★
- 三條西公正校訂★★
- 三條西公正校訂★★
- 三條西公正校訂★★
- 三條西公正校訂★★
- 鏡 和田英松校訂★★

- 梁塵秘抄 佐佐木信綱校訂★
- 新山家集 佐佐木信綱校訂★★
- 水鏡 和田英松校訂★
- 松浦宮物語 峰須賀子校訂★
- 新古今和歌集 佐佐木信綱校訂★★
- 藤原定家(附定家) 佐佐木信綱校訂★★
- 新金槐和歌集 増補 齊藤茂吉校訂★★
- 中世歌論集 久松潜一編★★
- 方丈記 山田孝雄校訂★
- 保元物語 岸谷誠一校訂★
- 平治物語 岸谷誠一校訂★
- 平家物語 上卷 山田孝雄校訂★★
- 平家物語 下卷 山田孝雄校訂★★
- 東關紀行・海道記 玉井幸助校訂★
- 十六夜日記 玉井幸助校訂★
- 神皇正統記 山田孝雄校訂★★
- 増鏡 和田英松校訂★★

徒然草	西田實校訂	草	西田實校訂
謡曲選集	野上豊一郎編	野上	野上豊一郎編
閑吟集	藤田徳太郎校註	藤田	藤田徳太郎校註
好色一代男	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
好色一代女	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
好色五人女	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
西語諸國	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
本朝櫻陰比事	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
武道傳牙記	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
武家義理物語	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
日本永代藏	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
世間胸算用	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
西鶴織留	西田萬吉校訂	西田	西田萬吉校訂
奥の細道その他	伊藤松字校訂	伊藤	伊藤松字校訂
芭蕉七部集	伊藤松字校訂	伊藤	伊藤松字校訂
芭蕉俳句集	原田謙蔵校註	原田	原田謙蔵校註
芭蕉連句集	小宮豊隆編	小宮	小宮豊隆編
芭蕉書翰集	勝峯晋風編	勝峯	勝峯晋風編
花屋日記	小宮豊隆校訂	小宮	小宮豊隆校訂
風俗文選	伊藤松字校訂	伊藤	伊藤松字校訂
燕村七部集	伊藤松字校訂	伊藤	伊藤松字校訂
燕村俳句集	原田謙蔵校註	原田	原田謙蔵校註
松の落葉	藤田徳太郎校註	藤田	藤田徳太郎校註
松の落葉	藤田徳太郎校註	藤田	藤田徳太郎校註
國性三合	近松門左衛門作	近松	近松門左衛門作
會我合	近松門左衛門作	近松	近松門左衛門作
心中天	近松門左衛門作	近松	近松門左衛門作
用明天	近松門左衛門作	近松	近松門左衛門作
鷗落本	高木好次校訂	高木	高木好次校訂
玉勝間(上)	本居宣長校訂	本居	本居宣長校訂
玉勝間(下)	本居宣長校訂	本居	本居宣長校訂
うひ山	本居宣長校訂	本居	本居宣長校訂
玉屋	本居宣長校訂	本居	本居宣長校訂
雨月	上田秋成校訂	上田	上田秋成校訂
良寛詩集	原田謙平校註	原田	原田謙平校註
椿説弓張月	上卷 田島嘉吉校訂	田島	田島嘉吉校訂
椿説弓張月	中卷 田島嘉吉校訂	田島	田島嘉吉校訂
椿説弓張月	下卷 田島嘉吉校訂	田島	田島嘉吉校訂
胡蝶物語	和馬嘉吉校訂	和馬	和馬嘉吉校訂
新一茶俳句集	藤原井泉水編	藤原	藤原井泉水編
おらが春・我春集	藤原井泉水校訂	藤原	藤原井泉水校訂
一茶父の終焉日記	藤原井泉水校訂	藤原	藤原井泉水校訂
東海道膝栗毛	十返舎一九作	十返	十返舎一九作
柳多留	上卷 西原柳雨校訂	西原	西原柳雨校訂
柳多留	中卷 西原柳雨校訂	西原	西原柳雨校訂
柳多留	下卷 西原柳雨校訂	西原	西原柳雨校訂
浮世風	呂式多三馬作	呂式	呂式多三馬作
浮世風	和馬嘉吉校訂	和馬	和馬嘉吉校訂
萬載狂歌集	野崎左文校訂	野崎	野崎左文校訂
徳和歌後萬載集	野崎左文校訂	野崎	野崎左文校訂
忍ぶの巻	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
鼠小僧	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂

赤垣源藏・仲光	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
辨の平右衛門	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
お藤	三河竹雲伝校訂	三河	三河竹雲伝校訂
實録先代萩	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
孝子善吉	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
加賀	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
改訂版花傳書	野上豊一郎校訂	野上	野上豊一郎校訂
申樂談義	野上豊一郎校訂	野上	野上豊一郎校訂
能作書・覺習條條	野上豊一郎校訂	野上	野上豊一郎校訂
至花道	野上豊一郎校訂	野上	野上豊一郎校訂
入木道三部集	野上豊一郎校訂	野上	野上豊一郎校訂
歌舞音楽略史	小中村清雄著	小中	小中村清雄著
俗樂旋律考	上原六郎著	上原	上原六郎著
論畫四種	坂崎垣編	坂崎	坂崎垣編
茶の本	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
日本思潮	河竹雲伝校訂	河竹	河竹雲伝校訂
宮崎農業全書	土屋謙雄校訂	土屋	土屋謙雄校訂
都鄙問答	石田梅巖校訂	石田	石田梅巖校訂
手島堵庵心學集	白石正邦編	白石	白石正邦編
松翁道話	石川謙校訂	石川	石川謙校訂
道二翁道話	石川謙校訂	石川	石川謙校訂
鳩翁道話	石川謙校訂	石川	石川謙校訂
蘭學事始	杉田玄白著	杉田	杉田玄白著
北越雪譜	岡田武松校訂	岡田	岡田武松校訂
一書言志四錄	山田五郎校訂	山田	山田五郎校訂
經濟要錄	佐藤信淵校訂	佐藤	佐藤信淵校訂
報德記	富田高慶校訂	富田	富田高慶校訂
二宮翁夜話	福住正兄校訂	福住	福住正兄校訂
海舟座談	巖本善治編	巖本	巖本善治編
日本道德論	西村茂樹著	西村	西村茂樹著
福澤撰集	吉田勲次校訂	吉田	吉田勲次校訂
文明論之概略	福澤諭吉著	福澤	福澤諭吉著
寒	陸奥宗光著	陸奥	陸奥宗光著
日本開化小史	田口卯吉著	田口	田口卯吉著
内村鑑三隨筆集	内村鑑三著	内村	内村鑑三著
清澤文集	清澤深藏著	清澤	清澤深藏著
網島梁川集	安倍能成編	安倍	安倍能成編
現代文學	島内遺著	島内	島内遺著
新曲	藤原井泉水校訂	藤原	藤原井泉水校訂
うたかたの記	森 鷗外著	森	森 鷗外著
キタ・セクスアリス	鷗外著	鷗外	鷗外著
護持院ケ原の敵討	鷗外著	鷗外	鷗外著
左千夫歌集	土屋文明校訂	土屋	土屋文明校訂
左千夫歌論抄	土屋文明校訂	土屋	土屋文明校訂
二人女	尾崎紅葉著	尾崎	尾崎紅葉著
子規歌集	正岡子規著	正岡	正岡子規著
墨汁一滴	正岡子規著	正岡	正岡子規著
病牀六尺	正岡子規著	正岡	正岡子規著
仰臥漫錄	正岡子規著	正岡	正岡子規著

漾 虚 集 夏 日 歌 石 著 ★★  
 坊 っ ち や ん 夏 日 歌 石 著 ★★  
 草 枕 夏 日 歌 石 著 ★★  
 行 人 夏 日 歌 石 著 ★★  
 こ ゝ 夏 日 歌 石 著 ★★  
 硝 子 戸 の 中 夏 日 歌 石 著 ★★  
 道 草 夏 日 歌 石 著 ★★  
 明 暗 上 卷 夏 日 歌 石 著 ★★  
 明 暗 下 卷 夏 日 歌 石 著 ★★  
 風 流 佛 ・ 一 口 劍 幸 田 賢 伴 著 ★★  
 五 重 塔 幸 田 賢 伴 著 ★★  
 自 然 と 人 生 徳 富 隆 花 著 ★★  
 北 村 透 谷 集 島 崎 藤 村 著 ★★  
 文 道 遙 遺 稿 笠 川 臨 風 著 ★★  
 觀 音 岩 前 篇 川 上 眉 山 著 ★★  
 觀 音 岩 後 篇 川 上 眉 山 著 ★★  
 源 を ぢ 他 二 篇 國 木 田 獨 歩 著 ★★

運 命 論 者 他 二 篇 國 木 田 獨 歩 著 ★★  
 號 外 他 六 篇 國 木 田 獨 歩 著 ★★  
 蒲 團 ・ 一 兵 卒 田 山 花 鏡 著 ★★  
 生 田 山 花 鏡 著 ★★  
 田 舍 教 師 田 山 花 鏡 著 ★★  
 晚 翠 詩 抄 土 井 曉 翠 著 ★★  
 に け こ ゝ ら べ 樋 口 一 葉 著 ★★  
 藤 村 詩 抄 島 崎 藤 村 自 選 ★★  
 千 曲 川 の ス ケ ッ チ 島 崎 藤 村 著 ★★  
 生 ひ 立 ち の 記 島 崎 藤 村 著 ★★  
 櫻 の 實 の 熟 す る 時 島 崎 藤 村 著 ★★  
 飯 倉 だ よ り 島 崎 藤 村 著 ★★  
 春 を 待 ち つ つ 島 崎 藤 村 著 ★★  
 高 野 聖 泉 頌 花 作 ★★  
 風 流 儀 法 他 三 篇 高 濱 康 子 著 ★★  
 上 田 敏 詩 抄 手 野 賢 々 編 ★★  
 有 明 詩 抄 藤 原 有 明 著 ★★

泣 露 詩 抄 藤 田 位 雷 著 ★★  
 宣 言 有 島 武 郎 著 ★★  
 長 塚 節 歌 集 費 藤 茂 吉 選 ★★  
 入 江 の ほ と り 正 祭 白 鳥 著 ★★  
 生 ま さ り し な ら ば 正 祭 白 鳥 著 ★★  
 千 鳥 他 四 篇 鈴 木 三 重 吉 作 ★★  
 銀 の 匙 中 勘 助 作 ★★  
 煤 煙 森 田 草 平 作 ★★  
 和 解 ・ 或 る 男 志 賀 直 哉 著 ★★  
 其 姉 の 死 志 賀 直 哉 著 ★★  
 小 僧 の 神 様 他 十 篇 志 賀 直 哉 著 ★★  
 白 秋 詩 抄 北 原 白 秋 著 ★★  
 白 秋 抒 情 詩 抄 北 原 白 秋 著 ★★  
 海 神 丸 野 上 彌 生 子 著 ★★  
 大 石 良 雄 野 上 彌 生 子 著 ★★  
 そ の 妹 武 者 小 路 實 篤 著 ★★  
 幸 福 者 武 者 小 路 實 篤 著 ★★  
 人 間 萬 歳 武 者 小 路 實 篤 著 ★★

友 情 武 者 小 路 實 篤 著 ★★  
 波 山 本 有 三 著 ★★  
 青 銅 の 基 督 長 興 善 郎 著 ★★  
 陸 奥 直 次 郎 長 興 善 郎 著 ★★  
 出 家 と そ の 弟 子 倉 田 百 三 著 ★★  
 布 施 太 子 の 入 山 倉 田 百 三 著 ★★  
 偷 盜 芥 川 龍 之 介 著 ★★  
 侏 儒 の 言 葉 芥 川 龍 之 介 著 ★★  
 河 童 芥 川 龍 之 介 著 ★★  
 厭 世 家 の 誕 生 日 佐 藤 春 夫 著 ★★

英・米 文 學  
 ニートピア (理想郷) トマス・モア 著 ★★  
 ベーコン隨筆集 神吉三郎 著 ★★  
 フォースタニ博士 マーロウ 著 ★★  
 闘技者サムソン ミルトン 著 ★★  
 ブレイク抒情詩抄 費岳文章註 ★★

パーイズ詩集 中村爲治 著 ★★  
 ラム沙翁物語 野上彌生子 著 ★★  
 イン・メモリアム ナニス 著 ★★  
 イノック・アーデン テニス 著 ★★  
 クリスマス・カロール デイツケン 著 ★★  
 爐邊のこぼろぎ デイツケン 著 ★★  
 プラウサ ウル 著 ★★  
 喜劇 相良徳三 著 ★★  
 エレ・ホン 山本政喜 著 ★★  
 パーター論集 田部重治 著 ★★  
 ハーディ短編集 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他六篇) 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他五篇) 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他四篇) 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他三篇) 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他二篇) 森村 豊 著 ★★  
 ハーディ短編集 (他一篇) 森村 豊 著 ★★  
 新アラビヤ夜話 佐藤 謙 著 ★★  
 寶島 佐々木直次郎 著 ★★  
 ジーヘル博士と 岩田良吉 著 ★★  
 獄中記 阿部知二 著 ★★

人と超人 市川又彦 著 ★★  
 鯨夫の家 市川又彦 著 ★★  
 思想の達し限る限り (原名ノトセラ時代に關し) 相良徳三 著 ★★  
 聖女チヨウク 野上彌生子 著 ★★  
 ビーター・パン 野上彌生子 著 ★★  
 アイルランド童話集 山宮 允 著 ★★  
 除を組んで歩く妖精達 山宮 允 著 ★★  
 争 闘 石田幸太郎 著 ★★  
 静寂の宿 本多顯彰 著 ★★  
 ユリシイズ (一) ジエイムズチヨイス 著 ★★  
 ユリシイズ (二) ジエイムズチヨイス 著 ★★  
 ユリシイズ (三) ジエイムズチヨイス 著 ★★  
 ユリシイズ (四) ジエイムズチヨイス 著 ★★  
 ユリシイズ (五) ジエイムズチヨイス 著 ★★  
 マンスフィールド 崎山正設 著 ★★  
 スケッチ・ブック アーカイング 著 ★★  
 自然論 エマソン 著 ★★  
 短編集 佐藤 謙 著 ★★

緋文	字	ホーソン 清作	★★★
エヴァンジン	リン	ロンドフエロー 作	★★★
ボウ黒猫	(他六篇)	森村 豊 譯	★★★
ボウ黒草	の葉	有島武郎 譯	★★★
王子と乞食		マク・トウエン 作 村岡花子 譯	★★★
小公	子	バアネット 著 若松健子 譯	★★★
あしなが	おちさん	ホーレン・ウーニツス 著 遠藤高子 譯	★★★
地平の彼方		オニール 著 清野暢一 譯	★★★
<b>獨・塊文學</b>			
賢者ナータン		大庭米治 譯	★★★
フアウスト第一部	森	司外 譯	★★★
フアウスト第二部	森	司外 譯	★★★
ヘルマンとドロテア		佐藤通次 譯	★★★
若いゾルテルの悩み		若野節々 譯	★★★
ゾルヘルム	上巻	久野 譯	★★★
ゾルヘルム	下巻	久野 譯	★★★
マイスター	下巻	久野 譯	★★★
たくみと	戀	吉田 譯	★★★
ヴレンシニク	アイン	シラ 譯	★★★
ヴィルヘルム・テル		常良 譯	★★★
黄金寶壺		石川道雄 譯	★★★
牡猫の人生	觀	ホフマン 著 秋山六郎兵衛 譯	★★★
全グリム童話集	第一	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第二	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第三	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第四	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第五	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第六	金田鬼一 譯	★★★
全グリム童話集	第七	金田鬼一 譯	★★★
ゲエテと對話抄		尾島英四郎 譯	★★★
ハルツ紀行		内藤 譯	★★★
三色堇・溺死		伊藤武雄 譯	★★★
埋		木 譯	★★★
アルト		マイア 著 匠谷英一 譯	★★★
ハイデルベルク		匠谷英一 譯	★★★
ソアーナの異教徒		ハウンツマン 作 奥津彦重 譯	★★★
日の出前		ハウンツマン 作 橋本忠夫 譯	★★★
沈		ハウプトマン 作 阿部六郎 譯	★★★
希臘の春		城田皓一 譯	★★★
改春の目ざめ		ウエデキント 著 野上豊一 譯	★★★
悪童物語		實吉健郎 譯	★★★
トオマス・マン短篇集	一	實吉健郎 譯	★★★
トオマス・マン短篇集	二	實吉健郎 譯	★★★
トオマス・マン短篇集	三	實吉健郎 譯	★★★
平		行 譯	★★★
祖		久保 譯	★★★
維納の辻音楽師		石川 譯	★★★
み		森 譯	★★★
アナトール		小宮 譯	★★★

ポリウクタ		コルネイユ 作	★★★
人間嫌ひ		モリエール 作 関口存男 譯	★★★
愛と偶然との戯れ		マリーザ 作 遠藤誠一 譯	★★★
マノン・レスコオ		アベ・プレウ 作 河盛好義 譯	★★★
懺悔録	上巻	石川 譯	★★★
懺悔録	中巻	石川 譯	★★★
懺悔録	下巻	石川 譯	★★★
ボオルトとウイリジニ		ヤン・ビエール 作 木村太郎 譯	★★★
アドル		大塚 譯	★★★
スタン赤と黒上巻		桑原武夫 譯	★★★
スタン赤と黒下巻		桑原武夫 譯	★★★
ダール赤と黒		桑原武夫 譯	★★★
パルムの僧院		スタンダール 作 前川堅市 譯	★★★
戀愛論	上巻	スタンダール 著	★★★
戀愛論	下巻	スタンダール 著	★★★
從兄ボン	前篇	水野 譯	★★★
從兄ボン	後篇	水野 譯	★★★
從兄ボン	終篇	水野 譯	★★★
知られざる難作		水野 譯	★★★
海邊の悲劇	他三篇	水野 譯	★★★
エトルリアの遺		水野 譯	★★★
コロロン		水野 譯	★★★
カルル		水野 譯	★★★
屋根裏の哲人		水野 譯	★★★
椿		水野 譯	★★★
プチ・シウズ		水野 譯	★★★
偶氣なタルタラン		水野 譯	★★★
風車小屋だより		水野 譯	★★★
昔がたり		水野 譯	★★★
ノア・ノア		水野 譯	★★★
過		水野 譯	★★★
水島の漁夫		水野 譯	★★★
お菊		水野 譯	★★★
女の一生		水野 譯	★★★
生の誘惑		水野 譯	★★★
モウパッサン短篇集	一	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	二	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	三	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	四	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	五	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	六	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	七	前田 譯	★★★
モウパッサン短篇集	八	前田 譯	★★★
愛と死との戯れ		前田 譯	★★★
獅子座の流星群		前田 譯	★★★
パリユウ		前田 譯	★★★
法王廟の抜穴		前田 譯	★★★
田園交響樂		前田 譯	★★★



若き日の手紙 外山拾夫 著  
母への手紙 三好達治 著  
青い鳥 若月野矢 著

露西亞文學

オネーギン 米川正夫 著  
スペードの女王 神西清 著  
イワシとニキフネ 原久一 著  
外套 他二篇 伊吹山次郎 著  
昔氣質の地主たち 伊吹山次郎 著  
檢察官 米川正夫 著  
現代のヒーロー 中村白雲 著  
皇帝フォードル 中村白雲 著  
ルーデイン 原久一 著  
初恋 米川正夫 著  
煙 原久一 著

春の水彩 原久一 著  
グロウニンとパブリン 小沼建 著  
トウルグ散文詩 神西清 著  
新貧しき人々 原久一 著  
罪と罰 第一卷 中村白雲 著  
罪と罰 第二卷 中村白雲 著  
罪と罰 第三卷 中村白雲 著  
永遠の良人 原久一 著  
悪霊 第一編 米川正夫 著  
悪霊 第二編(上) 米川正夫 著  
悪霊 第二編(下) 米川正夫 著  
悪霊 第三編 米川正夫 著  
カラマゾフの兄弟 第一卷 米川正夫 著  
カラマゾフの兄弟 第二卷 米川正夫 著  
カラマゾフの兄弟 第三卷 米川正夫 著  
カラマゾフの兄弟 第四卷 米川正夫 著  
幼年時代 米川正夫 著

少年時代 米川正夫 著  
結婚の幸福 米川正夫 著  
戦争と平和 第一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第二十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第三十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第四十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第五十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第六十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第七十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第八十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十一卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十二卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十三卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十四卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十五卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十六卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十七卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十八卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第九十九卷 米川正夫 著  
戦争と平和 第一百卷 米川正夫 著

イヴン・イリツチの死 米川正夫 著  
光あるうちに 米川正夫 著  
クロイツェル・ソナタ 米川正夫 著  
復活 上巻 中村白雲 著  
復活 中巻 中村白雲 著  
復活 下巻 中村白雲 著  
開ける力 米川正夫 著  
生ける屍 米川正夫 著  
人生論 中村白雲 著  
人 原久一 著  
儼 原久一 著  
藝術とは 河野興一 著  
トルストイ日記抄 除村吉太郎 著  
ソニー・コガヤ 野上彌生子 著  
レフスカヤ 米川正夫 著  
伯父ワニーヤ 米川正夫 著  
三人姉妹 米川正夫 著  
櫻の園 米川正夫 著  
シベリヤの旅 三篇 神西清 著

接吻・可愛い女他二篇 原久一 著  
神々の復活(一) 米川正夫 著  
神々の復活(二) 米川正夫 著  
神々の復活(三) 米川正夫 著  
神々の復活(四) 米川正夫 著  
幼年時代 米川正夫 著  
サニーニ 上巻 中村白雲 著  
サニーニ 下巻 中村白雲 著  
希臘羅馬神話 野上彌生子 著  
クオレ 愛の上巻 前田眞 著  
クオレ 愛の下巻 前田眞 著  
恐ろしき媒 永田寛定 著  
作り上げた利害 永田寛定 著  
子守唄 永田寛定 著  
繪なき繪本 野上彌生子 著

南歐・北歐文學 其他

即興詩人 上巻 森岡外郎 著  
即興詩人 下巻 森岡外郎 著  
村のロメオとユリア 草間平作 著  
アミエルの日記(一) 河野興一 著  
アミエルの日記(二) 河野興一 著  
アミエルの日記(三) 河野興一 著  
アルプスの山の娘 野上彌生子 著  
ブランド 角田俊 著  
キイランド短篇集 前田眞 著  
島の農民 草間平作 著  
大海のほとり 草間平作 著  
父 小宮豊隆 著  
令嬢 ユリエ 野上彌生子 著  
稲妻 小宮豊隆 著  
幽霊 小宮豊隆 著  
東洋思想・文學



弘法 三教指歸 加藤精神註  
 上人愚迷發心集 高橋承慶校註  
 歎 異 抄 金子大榮校訂  
 正法眼藏隨聞記 和辻哲郎校訂  
 日蓮上人抄 藤崎正治校註  
 一遍上人語錄 藤原正校註  
 夢中問答 佐藤泰輝校訂  
 禪海一瀾 今北洪川著  
 太田保壽校註

自然科學

アラバ蠟燭の科學 矢島祐利著  
 種の起原 上卷 小泉丹著  
 人及び動物の 表情について 濱中源太郎著  
 ダルン アルプスの旅より 矢島祐利著  
 ダルン アルプス紀行 矢島祐利著  
 アルプスの水河 (主に話話的) 矢島祐利著  
 アルプスの水河 (主に科學的) 矢島祐利著

天才と遺傳 上卷 甘粕石介著  
 天才と遺傳 下卷 甘粕石介著  
 雜種植物の研究 小泉丹著  
 フアール昆蟲記 山田吉彦著  
 第二分册・第五分册・第九分册  
 第十分册・第十二分册・第十三分册  
 第十四分册・第十七分册・第十八分册  
 第二十分册 既刊 定價各々  
 生命の不可思議 上卷 後藤格次著  
 生命の不可思議 下卷 後藤格次著  
 自然美と其驚異 板倉勝忠著  
 チャールズ 小泉丹著  
 ラブラタの博物學者 岩田良吉著  
 家畜系統史 加藤一著  
 科學の價值 田邊元著  
 科學と方法 吉田洋一著  
 科學者と詩人 平林初之輔著  
 科學的宇宙觀の變遷 寺田寅彦著

法律・政治

アリストテレスの國家論 國岡壽  
 君主論 馬田正利著  
 法の精神 上卷 宮澤俊義著  
 法の精神 下卷 宮澤俊義著  
 人間不平等起原論 本田嘉代治著  
 民約論 平林初之輔著  
 權利のための闘争 日沖登郎著  
 近代民主政治 卷一 松山武著  
 近代民主政治 卷二 松山武著  
 近代民主政治 卷三 松山武著  
 近代民主政治 卷四 松山武著  
 近代民主政治 卷五 松山武著  
 慣習と權利 青山道夫著  
 法と國家 堀眞著  
 經濟・社會

ケネー經濟表 増井幸雄著  
 スミ國富論 上卷 矢島祐利著  
 オオ富に関する省察 永田清輝註  
 マル初版人口の原理 高野岩三郎著  
 經濟學及課税之原理 小泉信三著  
 地代論 山口正四著  
 ミル自傳 西本正美著  
 資本論初版鈔 長谷部文雄著  
 賃労働と資本 長谷部文雄著  
 賃銀價格および利潤 長谷部文雄著  
 フランスに於ける内亂 木下半治著  
 マル猶太人問題を論ず 久留間敏雄著  
 改訂國家の起源 西澤雅之著  
 住宅問題 加田哲二著  
 エング空想より科學へ 野原景著  
 道徳的經濟的基礎 草間平作著  
 經濟的財價值 長守善著

資本論解説 大里傳平著  
 經濟學入門 佐野文夫著  
 資本蓄積論 上卷 長谷部文雄著  
 資本蓄積論 中卷 長谷部文雄著  
 資本蓄積論 下卷 長谷部文雄著  
 資本蓄積再論 長谷部文雄著  
 ローザ・ルクセンブルグの手紙 松井圭子著  
 戦争論 上卷 馬込健之助著  
 戦争論 下卷 馬込健之助著  
 労働者綱領 小泉信三著  
 暴力論 上卷 木下半治著  
 暴力論 下卷 木下半治著  
 ベル婦人論 上卷 草間平作著  
 ベル婦人論 下卷 草間平作著  
 婚姻の諸形式 木下史郎著  
 戀愛と結婚 上卷 原田實著

戀愛と結婚 下卷 原田實著  
 マルクス・エンゲルス傳 長谷部文雄著  
 ニン何を爲すべきか 平田良徳著  
 カール・マルクス (他五篇) 伊藤弘著  
 レーニンの手紙 中野重治著  
 ゴオリキーへの手紙 長谷部文雄著  
 シン帝國主義 長谷部文雄著

御註文に就て

□此の文庫は、普及を第一義として刊行する廉價版です。  
 □内容の精選 古今東西のあらゆる古典及び、價値高き良書を網羅し、校訂、翻譯に於ても最善を期します。  
 □最低の廉價 出来る丈安く手に入れられる様に、小さい形の中に、深山の内容を盛る形式を採りました。  
 □購求の自由 しかも讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。  
 □印刷の鮮明、校正の正確。製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。  
 □體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀。  
 □活字は八ポイントを用ひました。  
 □約百頁を單位として星一つでそれを現はし。★一つ毎に二十錢の定價です。  
 □★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。  
 □番號はただ發行順に従つて之を逼ふものであります。

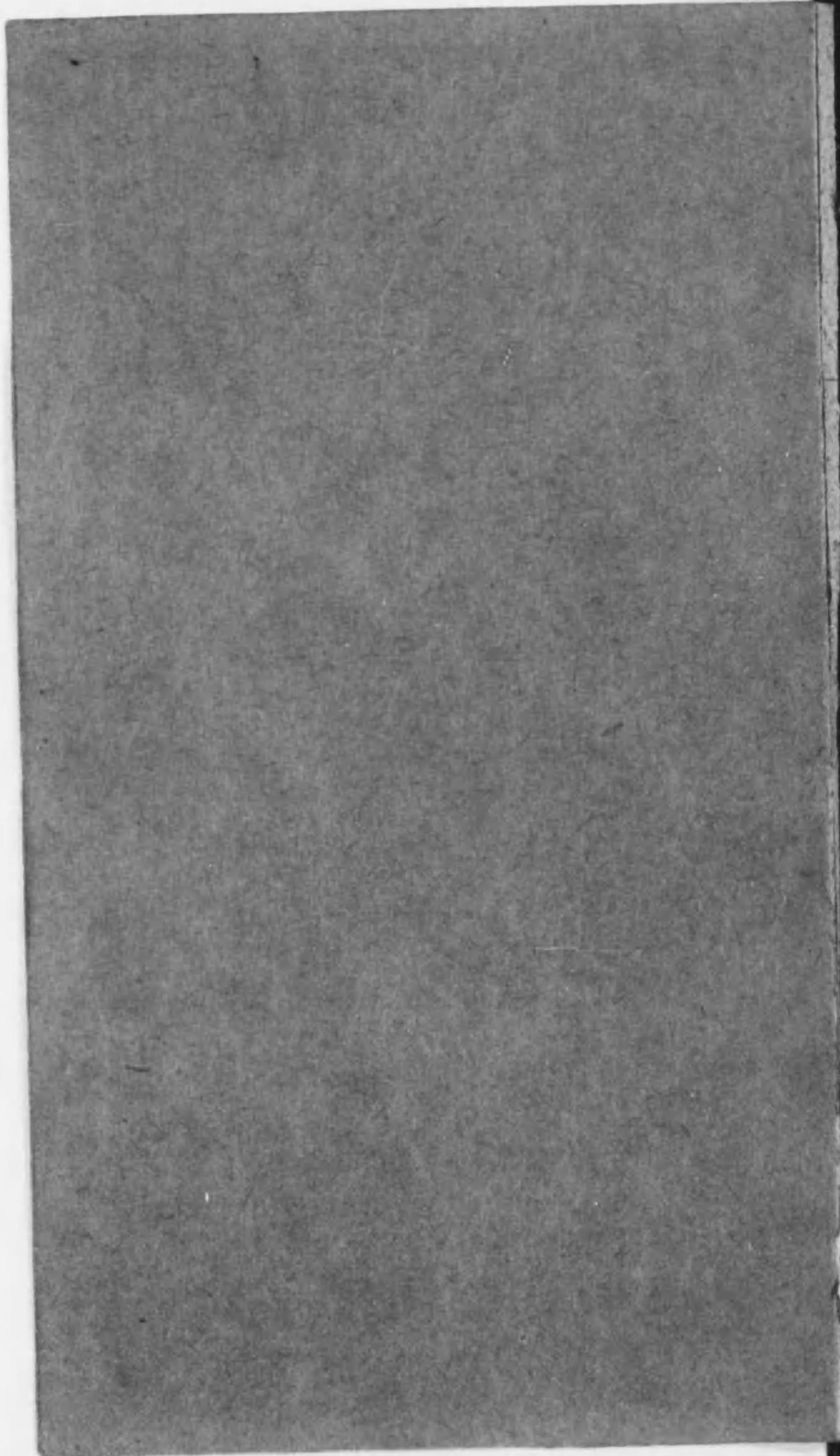
□★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。  
 □定價(及送料)は左表の通りです。  
 ★ 定價二十錢 送料二錢  
 ★★ 四十錢 四錢  
 ★★★ 六十錢 四錢  
 ★★★★★ 八十錢 六錢  
 ★★★★★★ 一圓 六錢  
 □御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なのですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一欄増に願ひます。

最新刊

宮崎安貞農	高野聖・眉かくしの靈	ジャン・クリストフ (八)	地 平 の 彼 方	三 色 堇・溺 死	ジャン・クリストフ (七)	哲 學 の 本 質	銀 の 匙	孫 子	牡 猫 ムルの人生觀 上卷	ア ミ エルの日記 (三)
業 全 書	泉 鏡 花 作	ロマン・オリラン 著 豊島 與志雄 譯	オニ 暢一 郎 譯 清野 一郎 譯	シヤ 藤 武 雄 譯 伊藤 武 雄 譯	ロマン・オリラン 著 豊島 與志雄 譯	デイル 三 郎 譯 戸田 三 郎 譯	中 勘 助 作	山 多 田 俊 介 譯 阿多 田 俊 介 譯	ホフ マン 兵衛 譯 秋山 六 郎 兵衛 譯	河 野 與 一 譯
★★★	★	★★★	★	★	★★★	★	★★★	★★★	★★★	★★★

最 新 刊

一年有半・續一年有半	サ	荒	雁	ど	月	歌	桑	鈴木牧之	松
		野						北	翁
	ロ	に		ん	曜	行	の	越	道
		生			物			雪	話
	メ	れ		底	語	燈	實	譜	
		て							
嘉中	佐ワ	本チ	森	中ゴ	櫻ド	泉	鈴	岡	石
治江	々々	多ク	鷗	村ー	田ー	鏡	木三	田武	川
隆篤	木直	顯ル	外	白キ	デ	花	重吉	松校	謙
一編	次郎	彰	作	葉イ	佐	作	作	校訂	校訂
校著	譯作	譯作		譯作	譯著				
★	★	★★	★	★	★★	★	★	★★	★★



波岩

569  
14

終